

# 総合的な学習・探究の時間に関する 現状・課題と検討事項



## 1. 総合の特質と現行のポイント

- 総合的な学習の時間（以下「総合」という。）は「横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく資質・能力（高校においては「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力）」を育成することが目標
- 各学校が、自らの教育目標を踏まえて総合の目標・内容を定め、創意工夫を生かした特色ある教育活動の展開に繋げる等の特質を持つ
- 現行では、小中学校での成果を生かしつつ、より探究的な活動を重視する視点から、高校における名称を「総合的な探究の時間」として位置づけを見直し

## 2. 総合がもたらした成果

- 「総合」創設から約30年が経過し、積極的に取り組む教師・児童生徒が増加傾向。地域課題の解決や地方創生に寄与する例も生まれている
- 探究的な学びに積極的に取り組んだ児童生徒は、全国学調において様々なアンケート項目にも肯定的に回答
  - ✓ 授業で「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」
  - ✓ 授業での学びを「次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりできる」
  - ✓ 分からないことがあった時に「自分で学び方を考え、工夫できる」
  - ✓ 「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」等
- 児童生徒が探究の成果を発表するステージが、官民双方で広範に展開される、高校・大学入試で積極的に評価を行う例が増えている等、社会全体で探究を応援する機運が醸成されてきている

## 3. 小中高に共通する課題

### <探究の目標や範囲に関わること>

- 探究の質の考え方や目標の示し方を含め、探究の意味する範囲や、発達段階に応じた学びの姿が十分に共通認識されていない
- 総合の目標と学校教育目標（高校の場合、スクールポリシー）との関連を図ることとしているが、具体的な姿が必ずしも明確ではない
- 何をどのように評価するか、しなくてよいか等、目標に照らした評価の考え方や方法が必ずしも明確とは言えない
- こうした中、インターネットから収集した情報を単に切り貼りしている事例、探究のプロセスを形式的に回し、学びが空洞化している事例も散見される

### <デジタル学習基盤の活用>

- いわゆる「デジタル技術の民主化」が進む中で、ICTは様々な課題解決の手段として活用されている。一方で、ICTが本来相性の良いはずの探究において十分に活用されていない現状もあり（PISA2022）、デジタル学習基盤を探究を支える基盤としてさらに機能させる余地が大きい
- 上記のような学びが空洞化している事例が散見される中で、生成AIを含むデジタル技術の活用について、探究への活かし方や、豊かな学びに繋がらない使い方等、具体的な考え方が示されていない

### <教師の負担感に関わること>

- カリキュラムの設計に困難を感じる等の声がある
- 探究に関する校務分掌や伴走支援、地域の支援体制等が十分整備されておらず、特定の教師に負担が偏る傾向



## <テーマ設定、各教科等との関連>

- 探究テーマとして、職業や福祉、国際理解が多いが、ICT活用が進んでいないことも相まって、ものづくりや科学技術が少ない。
- 学校で設定した総括的テーマが重視され、グループ探究が主で、個人の興味関心が十分に考慮されない例が多く見られる
- 教科等横断が過度に強調されることが、生き方や在り方と向き合うことに繋がっていない事例や、生き方に関わる探究課題を児童生徒が各教科等の題材から見出す場合に、そのことを総合で一層深める余地があるとの指摘
- 総合を「探究の中核」と位置づけた際には、各教科等でも探究の要素を持つ学習が一定程度行われ、総合と有機的に連動することを意図されていたが、各教科等で探究の位置づけや具体的イメージが曖昧だったこともあり、総合と各教科等の連携には改善の余地が大きい
- 自己の生き方や在り方に関わる領域という点で共通性を有する特別活動や道徳との役割分担が明確でない、総合における学習活動をもって行事の実施に替えることができる場合の整理が十分ではない等の指摘

## 3. 小学校固有の課題

- 論点整理は、小学校総合に「情報の領域（仮称）」を付加するにあたり、情報技術の学習自体が総合の目的との誤解を受けないよう、自ら課題を設定し、解決に取り組むことを通じて自己の生き方を考えるという探究的な学びの特質が十分に発揮されるよう配慮しつつ、探究的な学びと一体的に指導する必要性を提起
- これを踏まえ、具体的な位置づけや、「情報の領域（仮称）」での学びを基盤として、質の高い探究を実現する学習の在り方を検討する必要

## 4. 中学校固有の課題

- 総合の本来の趣旨とは距離のある様々な活動に総合の時数が充てられ、まとまった時間を割いて探究に取り組めていない事例があるとの指摘
- 高校入試も控える中、小・高と比較しても、精力的な実践が十分でないとの指摘もあり、過度な負担なく実施できる質の高い探究の在り方を検討する必要
- また、生徒の多様な興味関心に応じることが必ずしもできていないとの指摘もあり、効果的・効率的な校内体制整備を進める余地

## 5. 高等学校固有の課題

- 生徒が自ら課題を設定する取組が少しずつ定着しつつあるものの、総合の本来の趣旨とは距離のある活動が依然として残る
- 課程（定時制、通信制等）や学科（普通科、専門学科等）の違いに加え、統廃合等による生徒集団の多様性の拡大も相まって、目指す探究の姿を各学校が試行錯誤する必要があり、取組状況に大きなばらつき
- 授業時間数には限りがある中、カリキュラムが過密であることもあり、学校外をフィールドにした大胆な取組が行いにくい
- 校務分掌や伴走体制、地域資源の活用が必ずしも進んでいない中、一部の担当教員に大きな負担がかかっている例もある

- 探究の充実は、知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力等の伸長のみならず、学びに向かう力、人間性等の涵養に大きな役割を果たす潜在性
- とりわけ、生成AIが急速に発展し、自己の考えや意思が一層重要になる時代に向け、思考や行動・好奇心の芽を一層大切にするとともに、他者との対話や協働、自己調整を通じて好きや得意を伸ばし、夢や希望を育み、自らの人生を舵取りする力に繋げていく学びを一層重視する必要



論点整理（第4章）を土台として、企画特別部会における教育課程全般に関する議論を踏まえ、以下の内容について検討。

## 1. 教育課程企画特別部会の議論を踏まえた検討事項

### (1) 総合的な学習・探究の時間を通じて育成する資質・能力の在り方・示し方

- 「学びに向かう力・人間性等」や「見方・考え方」の新しい整理を踏まえた目標の示し方
- 中核的な概念等に基づく内容や各教科との関わりを含む一層の構造化の在り方
- 総合の特質を踏まえた、表形式を活用した目標・内容の分かりやすい示し方

### (2) 総合的な学習・探究の時間の指導と評価の改善・充実の在り方

- 情報活用能力の育成強化を基盤として、「好き（興味・関心）を育み、得意を伸ばす」ことにつながる、総合における質の高い探究の充実のための方策  
（気づきや試行錯誤を促す適切な問いかけなど、教師が適切に指導性を発揮し、基礎的・基本的な内容を踏まえつつ、探究の質を高める授業改善の在り方を含む）
- 資質・能力の育成のために効果的かつ過度な負担が生じにくい総合の評価の在り方  
（論述・レポート・プレゼン・作品製作等の「学びの主体的な調整」が求められる評価課題の重視の在り方を含む）

### (3) 誰一人取り残さず資質・能力を育成する柔軟な教育課程の在り方

- 義務教育における調整授業時数制度や、高等学校における科目の柔軟な組み替えを可能とする仕組みを前提とした場合に、考えられる教育課程・学習指導の工夫の在り方
- 学校教育目標やスクールポリシーと総合のカリキュラムとの関係性の考え方
- 裁量的な時間を活用して個人探究を伴う体験活動を行うと学校が判断する場合の、総合との役割分担の在り方
- 教育課程の柔軟化に伴って生じうる課題とそれを防ぐための運用の在り方

## 2. 総合的な学習・探究の時間に関する課題を踏まえた固有の検討事項

### (1) 小学校段階

- 「情報の領域（仮称）」の具体的な位置づけや学習の在り方  
【情報・技術WGと合同で検討】
  - ✓ 初等中等教育を通じて育むべき情報活用能力の体系性や系統性を踏まえた、小学校段階で育むべき情報活用能力の在り方
  - ✓ 「情報の領域（仮称）」において、「探究的な学びの特質が十分に発揮される」ような学習の在り方。特に、情報の領域（仮称）と従来の総合における探究との関係性やそれらの具体的な在り方



# ワーキンググループにおける検討事項・論点

- ✓ 技術の進展に伴い教育内容が妥当性を失うことを防ぐとともに、教師の過度な負担を避けつつ、現場が手軽に使うことができる「情報の領域（仮称）」の教材の提供など、必要な環境整備の在り方

## （２）中学校・高校段階

- 中学校・高等学校の実情や発達段階を踏まえた探究の質の向上の具体的な在り方
- 中学校「情報・技術科（仮称）」や高校情報科での学びの、総合における探究への効果的な活用の在り方

## （３）小中高を通じて

- 探究に関する考え方の整理
  - ✓ 「探究」の意味する範囲や質の考え方
  - ✓ 課題設定の充実を含む「探究のプロセス」の在り方
  - ✓ 学校段階に応じた資質能力の示し方
  - ✓ 「学びに向かう力・人間性等」を育む上での探究の役割
  - ✓ 「問題発見・解決」との関係
- 総合と各教科等との関係の示し方
  - ✓ 「生き方」に関わる領域である総合、道徳、特別活動の関係（キャリア教育における総合の役割や学校行事との関係を含む）
  - ✓ 総合の探究と各教科の探究との関係
  - ✓ 総合の探究と各教科の学びとの関係（探究を適切に機能させるための、基礎的・基本的な内容の習得の重要性や、質の高い探究のプロセスが基礎的・基本的な内容の習得の必要性を感じさせ、両者が往還して高まっていく等の関係を含む）

- 総則で「総合的な学習の時間における学習活動をもって相当する特別活動の学校行事に掲げる各行事の実施に替えることができる」とされている中、総合と学校行事との効果的な連携や役割分担の在り方
- 発達段階や情報活用能力の向上も踏まえた、グループでの探究と個人探究とのバランスや興味関心等を踏まえた多様なテーマ設定、探究における生成AIを含むデジタル技術の活用についての考え方

## （４）その他条件整備等

- 個々の児童生徒の思いや願い・好奇心に基づく探究の推進や、学校のカリキュラム設計の負担軽減、教職員の学びの機会の充実の在り方
- 一部の教員への過剰な負担がかからないような、持続可能な校内体制の工夫やその示し方
- 地域人材や企業等との連携の一層の推進に向けた方策
- 探究のフィールドが外部に広がる中、社会の理解を促進する観点から、外部に協力を求める場合の基本的な留意事項の必要性等も踏まえた、教員や児童・生徒が自由に参照できるデジタル技術も活用した参考資料の在り方や示し方
- 探究への支援や成果の発表の場ともなる外部のイベント等について、国としての更なる振興の在り方

## 論点整理（抜粋）



# 探究的な学びに関わる成果と課題・検討の方向性

## 1. 総合のこれまでの成果

- 総合的な学習の時間（以下「総合」）創設から約30年が経過し、積極的に取り組む教師・児童生徒が増加傾向。地域課題の解決や地方創生に寄与する例も生まれている
- 探究的な学びに積極的に取り組んだ児童生徒は、全国学調において様々なアンケート項目にも肯定的に回答している
- 児童生徒が探究の成果を発表するステージも、官民双方で広範に展開される、高校・大学入試で積極的に評価する等、社会全体で探究を応援する機運が醸成されてきている

## 2. 総合の直面する主な課題

- 小中では、総合に積極的に取り組む教師・児童生徒は増加傾向であり、高校では「総合的な探究の時間」と名称変更し、改善に一定程度寄与してきた
- 一方で、小中高全体として、カリキュラムの設計に困難を感じる、授業が調べ学習で終わってしまう、型にはまった授業や児童生徒任せの授業になってしまう等の声も聞かれ、育成を目指す学びの姿が十分な共通認識に至っていないとの指摘もある。探究と相性のよいICTの活用の伸びしろを示唆するデータもある
- 総合を探究的な学びの中核と位置付けた趣旨は、教育目標の具現化とともに、各教科等でも探究の要素を持つ学習が一定程度行われ、双方が有機的に連動することであり、各教科等の連携には更なる改善の余地がある
- 探究テーマとして、職業や福祉、国際理解が多いが、ICT活用が進んでいないことも相まって、ものづくりや科学技術が少ない。また、学校で設定した総括的テーマが重視され、個人の興味関心が十分に考慮されない例も見られる

## 検討の方向性

- 生成AIが更に発展し、人間の意思が一層重要になる時代に向け、思考や行動・好奇心の芽を一層大切にするとともに、他者との対話や協働、自己調整を通じて好きや得意を伸ばし、夢や希望を育み、自らの人生を舵取りする力に繋げていく取組を一層重視することが必要である
  - 総合を中核とした探究的な学びは、自ら課題を設定し、解決に向けて取り組む中で、自己の生き方や在り方を考えていくもの。その充実は、知識・技能や思考力・判断力・表現力等の伸長のみならず、学びに向かう力、人間性等の涵養に大きな役割を果たす潜在性を有している
- 
- 引き続き、総合を中心としつつも、各教科等との連携も明示的に含めた形で、探究的な学びの一層の充実・改善を検討すべき
    - ✓ いわゆる「デジタル技術の民主化」により、様々な課題解決に情報技術の活用が不可欠となってきたことを踏まえ、デジタル学習基盤を探究を支える基盤としても十分に機能させ、リアルな身体性を大切にしながら探究プロセスを自ら駆動できるようにする方向で、教育課程の枠組みの改善を検討すべき
    - ✓ こうした改善に当たっては、デジタル技術が認知や行動に与えるリスクに十分な対処をする観点も含め、生成AI等を含めた先端技術の特性理解を基に、情報モラルやメディアリテラシー等を併せて育む方向で検討すべき
    - ✓ 以上の改善も踏まえつつ、探究が①②に示した役割を十全に果たせるよう、総合が目指す学びについて、発達段階に応じた示し方等を検討すべき



# 具体的な方向性と論点①（質の高い探究的な学びの実現）

総合を中核としつつ各教科等も含めた形で探究的な学びを一層重視するとともに、質の高い探究に不可欠な情報活用能力の諸要素を教育内容として明記し、一体的に向上させる方向で検討すべき（詳しくは専門のWGで議論を深める）

## 1. 小学校段階

- 教育課程上の位置付けとしては、情報技術の活用の可能性が最も大きく、体験的な活動が充実している総合において、情報技術の適切な取扱いや特性の理解の基礎も含めて、探究的な学びと一体的・重点的に指導できるよう、情報活用能力を育む領域を付加すべき
- その際、情報技術の学習自体が総合の目的であるとの誤解を受けないよう、「自ら課題を設定し、解決に取り組むことを通じて自己の生き方を考えていく」という探究的な学びの特質が十分に発揮されるよう配慮すべき

## 2. 中学校・高等学校段階

- 小学校段階での一定レベルの情報活用能力の育成を前提とすれば、総合の中ではなく、現行の技術・家庭科（技術分野）を主たる受け皿と想定し、生成AI等の先端技術を含めた適切な取扱いや特性の理解を学び、総合をはじめ各教科等での探究的な学びのプロセスに活かすべき
- こうした観点から、中学校では、技術・家庭科を二つの教科に分離した上で、現行の技術分野において情報技術をより深く、広く学ぶこととしつつ、情報（D）領域のみならず、A～C領域でも情報技術との関連を強化し、全体として「ものづくり」と実生活・実社会を繋げる探究的な学びを充実させるべき（補足イメージ4-④参照）
- 高校では、小学校・中学校の系統性を踏まえて情報科の内容を充実しつつ、総合や各教科等での探究的な学びとの関連を図るべき

## 3. 小中高を通じて

- 約30年にわたる総合の実践の蓄積等を踏まえ、「問い」や「課題」の設定の質をはじめとする探究のプロセスの改善を含め、学校種ごとの総合の「目標」等について、発達段階を踏まえた示し方を検討すべき。その際、新たな枠組みの全体像も踏まえ、小・中学校での総合の名称について検討すべき
- 探究的な学びを適切に機能させるためには、基礎的・基本的な内容の習得も重要であるとともに、各教科も含めた質の高い探究のプロセスが基礎的・基本的な内容の習得の必要性を感じさせ、両者が往還して高まっていく等の関係について分かりやすく示すべき
- 探究的な学びにおいて、児童生徒任せになっている実践も見られることから、気付きや試行錯誤を促す適切な問いかけなど教師が適切に指導性を発揮し、基礎的・基本的な内容を踏まえつつ、探究的な学びの質を高める授業改善を進めるとともに、論述・レポート・作品製作等の「学びの主体的な調整」が求められる評価課題を重視することも必要になる
- グループでの探究と個人探究とのバランスや興味関心等を踏まえた多様なテーマ設定の在り方について、発達段階や情報活用能力の向上も勘案し、示し方を検討すべき



## 4. その他条件整備

- 探究的な学びに必要な時間の確保に資するという意味でも、デジタル学習基盤の活用や、学習指導要領の構造化や教科書の分量の精選、調整授業時数制度等により余白を生み出すこと、を進めていくべき
- 個々の児童生徒の思いや願い・好奇心に基づく探究の質の向上及び学校のカリキュラム設計の負担軽減が必要。また、探究のフィールドが外部に広がる中、社会の理解を促進する観点から、外部に協力を求める場合の基本的な留意事項等も必要である  
このため、これまでの実践の蓄積を可視化する形で、教員や児童・生徒が自由に参照できる参考資料をデジタル技術も活用して作成すべき
- 探究的な学びへの支援や成果の発表の場ともなる外部のイベント等について、国としても更なる振興を図るべき

<以下「情報活用能力の抜本的向上」の再掲>

- 中学校技術については、策定済の指導体制に係る改善計画を着実に履行するとともに、全面実施を待たず、指導主事を含めた研修機会の拡充や環境整備の推進など総合的な支援を行うべき
- 技術の進展に伴い、教育内容が妥当性を失うことを防ぎ、教師の過度な負担を避ける観点から、現場が手軽に使える動画教材などを国が提供することを検討すべき
- 上記に加えて、地域人材や企業等との連携の可能性も検討すべき
- 情報技術の加速度的な進化に対応した指導内容の刷新を図る観点から、教科書検定のサイクルを念頭におきつつ、学習指導要領解説の一部改訂をタイムリーに行うことを検討すべき
- 教科書でも対応しきれない変化が見込まれることから、国が必要に応じて指導の手引きやデジタル教材等を提供すべき

## 5. 「学習の基盤となる資質・能力」の整理

- 「分かりやすく、使いやすい」学習指導要領を目指すため、各教科等の学習の基盤として、発揮可能な資質・能力を明確にでき、教育実践に落とし込める具体性を有したものに整理すべき
  - ✓ 問題発見・解決能力については、「学習の基盤となる資質・能力」としては示さない。その上で、総合の目標の学校段階に応じた示し方を検討する中で、問題発見・解決の要素を重視するとともに、各教科等の学習の過程で問題発見・解決が重視されることを示すべき
  - ✓ 情報活用能力については、今般の情報教育の充実を契機に、学習の基盤となる資質・能力としては「情報技術の活用」に絞って示すとともに（「情報の活用」は各教科等の特質に応じて指導）、各教科等のみならず、探究的な学びを支え、駆動させる基盤として位置付けるべき
  - ✓ 言語能力については、全ての学習を支える基盤として重要な役割を果たしていることを踏まえ、現行の整理を前提としつつ、見直しが必要な部分がないか検討すべき
- これらのことを前提としつつ、「学習の基盤となる資質・能力」の全体について、今後総則・評価特別部会等において詳細に整理すべき

# 質の高い探究的な学びの実現に向けた新たな枠組み（①総合との関係）

探究的な学びの充実を図るため、情報活用能力を各教科も含めた探究的な学びを支え、駆動させる基盤と位置付け、探究と情報の一層の連携を以下の考えに基づき整理すべき

## 小学校



小学校段階は、**探究的な学び・情報技術の活用、いずれでも中心的な「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」について初めて取り組む段階**であることから、**一体的に取り組むことで効果的に実施**できる

発達段階を踏まえても、**体験的な活動が充実している総合**において、効果的な活用を可能とする適切な取扱いや特性の理解の基礎も含め、**探究的な学びと一体的・重点的に指導**できるよう、**情報活用能力を育む領域を付加**して学ぶ

## 中学校



小学校段階で**一定レベルの情報活用能力が育成**されることを前提として、**技術分野を中心に、適切な取扱いや特性の理解をより専門的に高め**、身に付けた資質・能力を**総合や各教科等での探究的な学びのプロセスで活用・発揮**する

## 高等学校



小学校・中学校の**系統性を踏まえて情報科の内容を充実**し、特に情報技術の特性の理解等を専門的に学びつつ、身に付けた資質・能力を**総合や各教科等での探究的な学びのプロセスで活用・発揮**する

# 質の高い探究的な学びの実現に向けた新たな枠組み (②全体イメージ)

- 主体的に学び、自らの人生を舵取りする力の育成や、多様で豊かな可能性を開花させる教育の実現を図るためには、一人ひとりが初発の思考や行動を起こしたり、好奇心を深掘りする中で、学びを主体的に調整し、自身の豊かな人生やより良い社会につなげていく「**質の高い探究的な学び**」の実現が不可欠
- この実現に向け、情報活用能力を各教科等のみならず、探究的な学びを支え、駆動させる基盤と位置付け、**探究・情報の双方の観点から大幅な改善を図る** (1) (4)とともに、**教育の質向上と教師の負担軽減を両立させる方策**(2)(3)(5)を検討すべき

## 幼児教育

## 小学校

## 中学校

## 高等学校

低学年 中学年 高学年

(1) 総合的な学習の時間に情報活用能力を育む領域を付加すべき。その際、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成するという、探究の特質が十分に発揮されるよう留意すべき

(2) 探究の質の向上及び学校の負担軽減を図るため、実践の蓄積を可視化する形で、裁量性を維持しつつ、教員や児童・生徒が参照できる参考資料を作成すべき

(3) 中学校及び高等学校での実践の蓄積や、新たな枠組みの全体像を踏まえ、「目標」等の示し方を検討すべき。その際、小中学校での名称についても検討すべき

自発的な活動としての

**遊びを通じた学び**

**生活科**

※具体的な活動や体験を通じた学び

**総合的な学習の時間**

探究

※課題解決を通じて生き方を考える

**+ 情報の領域 (仮称)**

↑活用

↓活用

**総合的な学習の時間**

↑活用

**情報・技術科 (仮称)**

↓活用

**総合的な探究の時間**

※自己の在り方生き方と一体不可分な課題に取り組む

↑活用

**情報科**

※小中の系統性を踏まえて情報科の内容を充実する方向で検討

↓活用

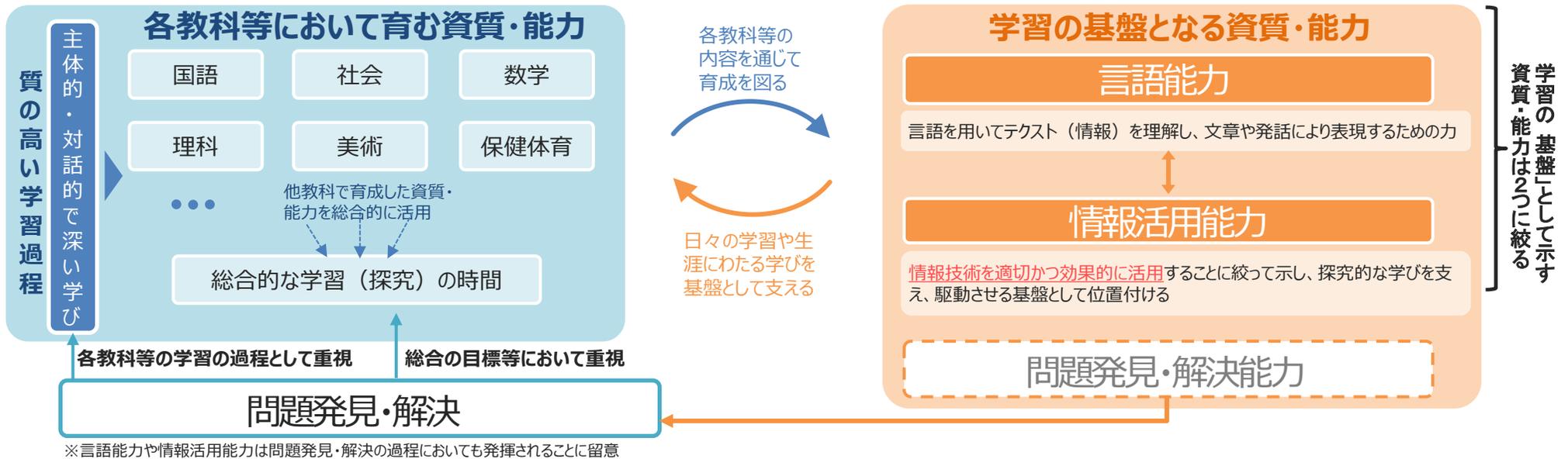
**各教科等**

※育んだ情報活用能力を各教科での探究的な学びを支え、駆動させる基盤としても活用

(4) 探究の質の向上を図る上で基盤となる情報活用能力の抜本的向上に向けて、技術分野の内容の大幅な充実を図るべき

(5) 情報技術は変化が極めて激しいことを踏まえ、教師の負担を軽減する動画教材等を国が提供・更新すべき

# 「学習の基盤となる資質・能力」の整理の方向性



## <問題発見・解決能力>

- ① 児童生徒が取り組む課題に伴って能力の具体が変わるものであり、全ての学習の「基盤」として発揮可能な資質・能力をあらかじめ明確化することは困難
  - ② また、こうした力は、本人にとって意義のある文脈で質の高い問題発見・解決を繰り返す中で発揮できるようになるものであり、そうした文脈から切り離して育成することは難しいとの指摘もある
  - ③ 一方、各教科等で培った資質・能力を総動員し、個々の関心等に応じて様々な問題を発見し解決していく力を育む重要性は増している  
今般検討している探究的な学びの充実は、「問題発見・解決」の要素と不可分一体（論点資料「3. 検討の方向性」）
- ➔ 「学習の基盤となる資質・能力」として示すのではなく、総合の目標の学校段階に応じた示し方を検討する中で、問題発見・解決の要素を重視するとともに、各教科等の学習の過程で問題発見・解決が重視されることを示すべき

## <情報活用能力>

- ① 現在「情報及び情報技術を活用」する力となっているが、言語能力との重複があるとの指摘
  - ② 現代社会で情報技術を介さない情報活用に係る能力の育成は実践イメージが持ちにくい
- ➔ 今般の情報教育の充実を契機に、学習の基盤となる資質・能力としては「情報技術の活用」に絞って示すべき（「情報の活用」は各教科等の特質に応じて指導）
- ➔ 各教科等のみならず、探究的な学びを支え、駆動させる基盤として位置付けるべき

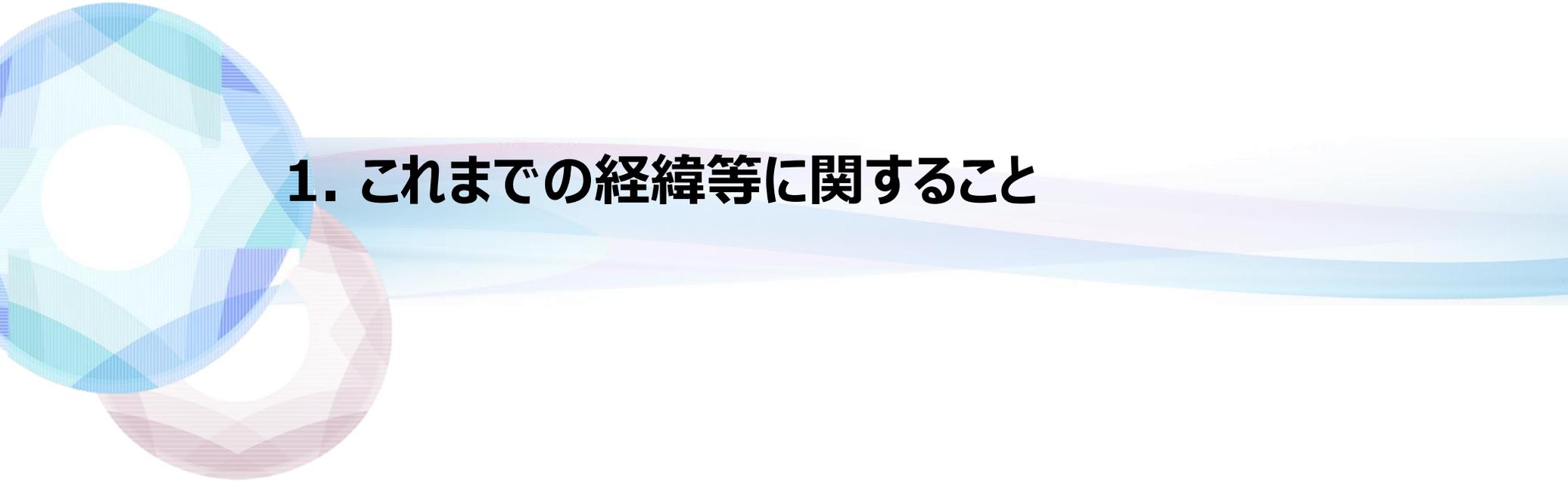
## <言語能力>

- 全ての学習を支える基盤として重要な役割を果たしている
- ➔ 現行の整理を前提としつつ、見直しが必要な部分がないか検討すべき

➔ これらのことを前提としつつ、学習の基盤となる資質・能力の全体について、今後総則・評価特別部会等において詳細に整理すべき

# 総合的な学習・探究の時間に関する 参考資料

1. これまでの経緯等に関すること …… P 13
2. 現状・課題に関すること …… P 18
3. 地域・社会に関すること …… P 36
4. 探究と情報活用能力の関係 …… P 42
5. その他 …… P 49

A decorative graphic on the left side of the slide features two overlapping circles. The upper circle is light blue with a white center, and the lower circle is light purple with a white center. A horizontal line with a light blue and purple gradient extends from the right side of the circles across the middle of the slide.

## 1. これまでの経緯等に関すること

# 探究的な学びと総合的な学習の時間（現行の位置づけ）

探究的な学びは、学習指導要領において、総合的な学習（探究）の時間を中心として、様々な教科等に位置づけられている。

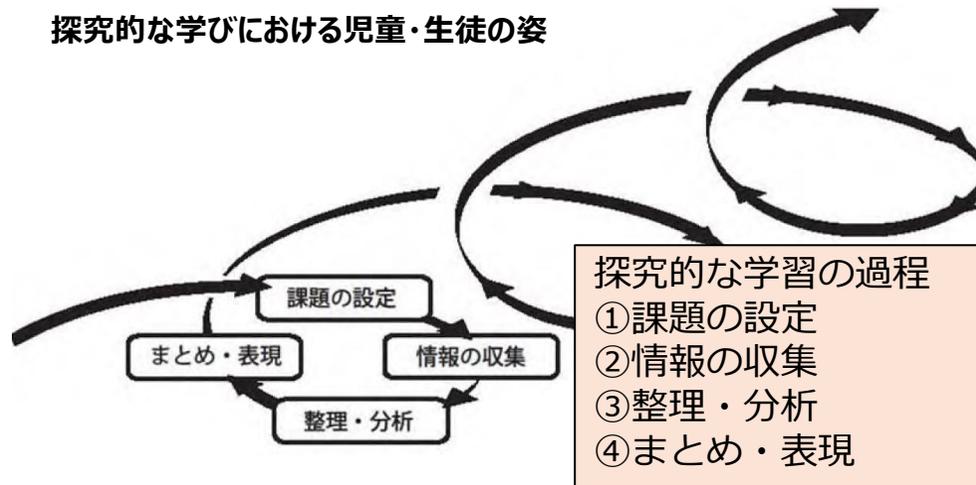
※ 中学校 理科・社会、特別の教科 道徳、高校 地理・歴史探究、古典探究・理数探究等にも位置づけがある。

## 探究的な見方・考え方

（小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編）

各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、**実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続ける**こと。

探究的な学びにおける児童・生徒の姿



## 総合的な学習の時間

（小学校学習指導要領 第5章 総合的な学習の時間）

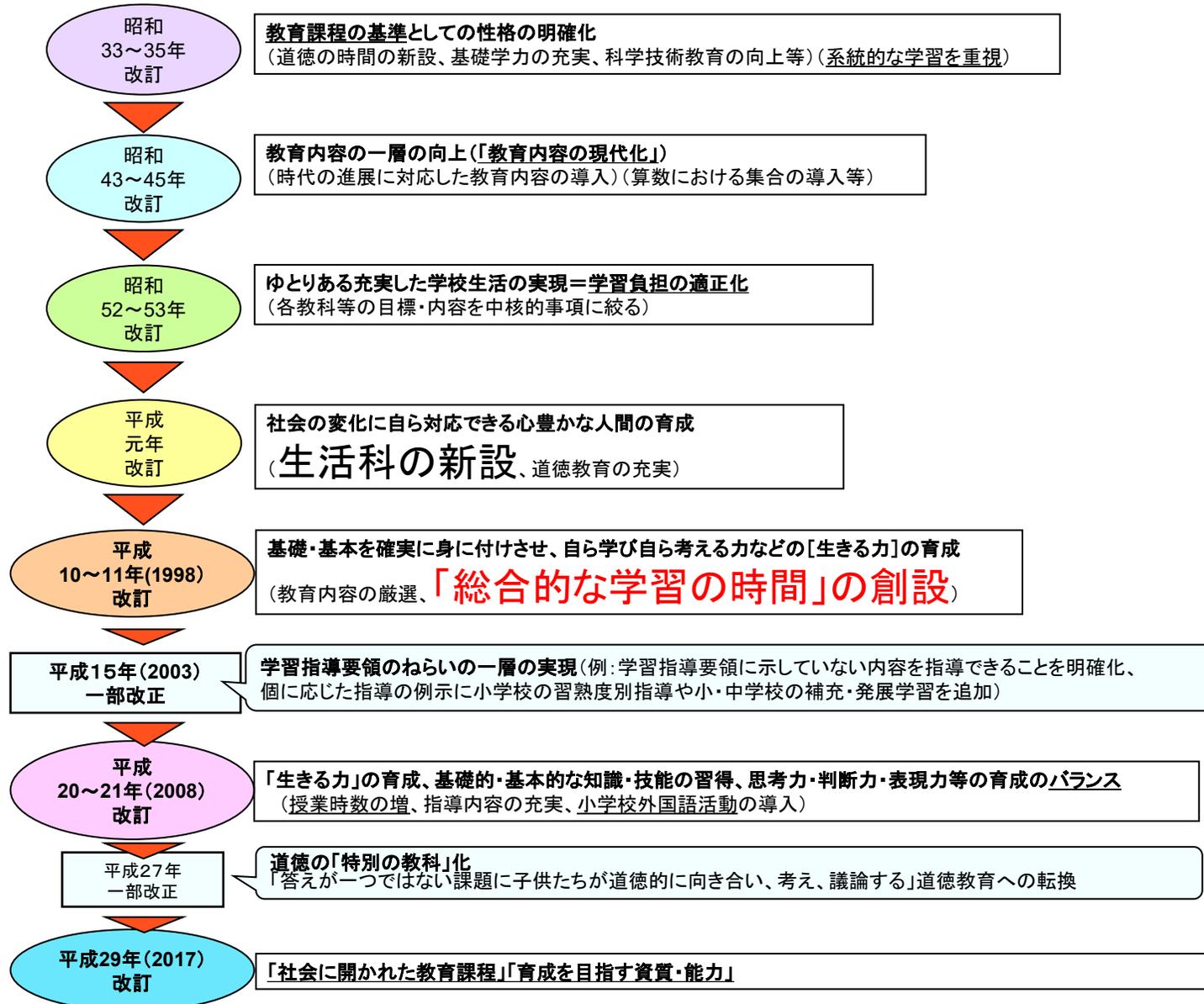
### 第1 目標

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、**自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成**することを旨とする。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

※ 総合的な学習の時間の特質として、第1の目標を踏まえ、各学校で目標及び内容を定めることとしている。

# 学習指導要領の変遷



# 総合的な学習の時間の変遷

## ○平成10年（1998）：学習指導要領の改訂

### 総合的な学習の時間の創設

- ・各学校が創意工夫を生かした特色ある教育活動
- ・教科等を超えた横断的・総合的な学習

## ○平成15年（2003）：学習指導要領の一部改正

### 総合的な学習の時間の一層の充実

- ・各教科等の知識や技能等の相互関連
- ・各学校における目標・内容の設定と全体計画の作成
- ・教師による適切な指導や教育資源の活用

## ○平成20年（2008）：学習指導要領の改訂

### 総合的な学習の時間の必要性和重要性の再確認

- ・時間数を縮減
- ・各学校で設定する位置付けの明確化
- ・横断的・総合的な学習や探究的な学習の推進

## ○平成29年（2017）：学習指導要領の改訂

### 総合的な学習（探究）の時間を中核とした教育課程編成

- ・総則に教育課程上の役割を明記
- ・目標、内容の改善
- ・教科横断的なカリキュラムマネジメントの中核

小3・4	小5・6	中1	中2	中3	高等学校
105	110	70 ～ 10 0	70 ～ 10 5	70 ～ 13 0	105～ 210時 間
70	70	50	70	70	3～6単 位
70	70	50	70	70	3～6単 位

■「学習指導要領の未来」（令和3年9月30日、学事出版）から引用 16

\* 昭和51年以来の研究開発学校等において実践研究

# 国際的潮流と社会状況の変化

## OECD「カリキュラムの（リ）デザイン」報告書

各国共通で時代を経ても変わらないカリキュラムデザインをガイドする原則（抄）

### ⑤ 教科横断性（INTERDISCIPLINARITY）

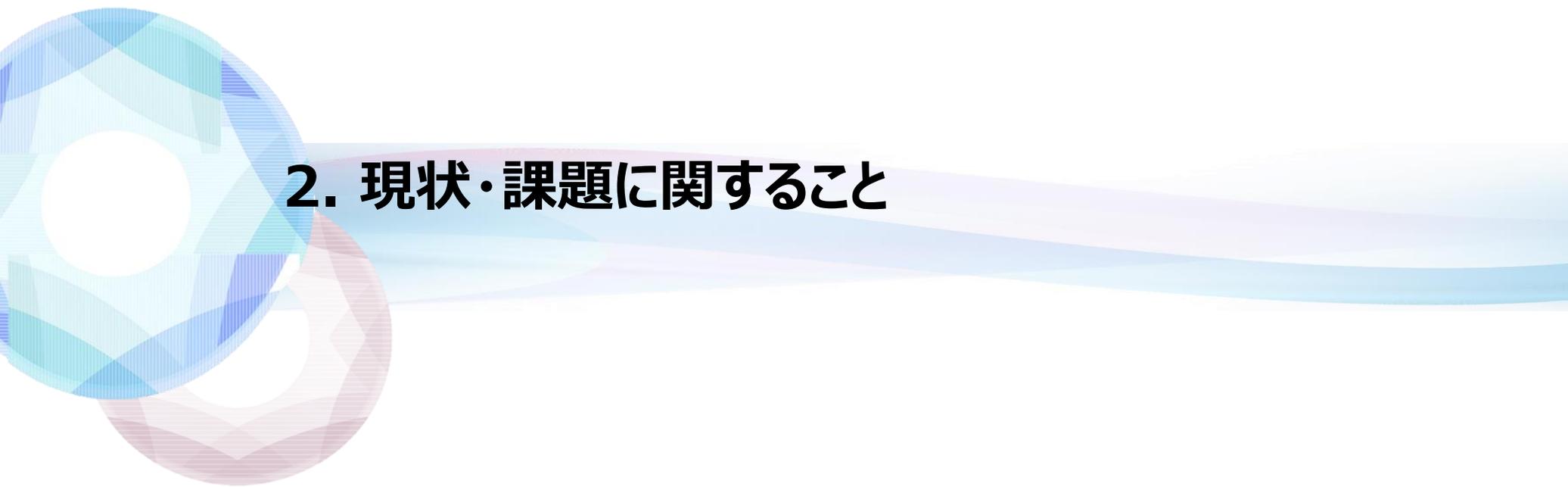
- （略） 題材や概念が単一または複数の教科でどのように他の題材や概念と関連づけられるのか、また学校の外でも応用できるのかを子どもが気づくことができるようにするものです。  
※日本の総合的な学習（探究）の時間を好事例として紹介

### ⑦ 真正性（AUTHENTICITY）

- 真正なカリキュラムとは、それが適切に用いられたとすれば、実社会とのつながりや交流の機会を作り出すものです。（略）カリキュラムの学習内容が真正である時、子どもたちは自分の興味、環境、そしてニーズに関連する現実的で適切な課題の探究が行える学びを経験します。

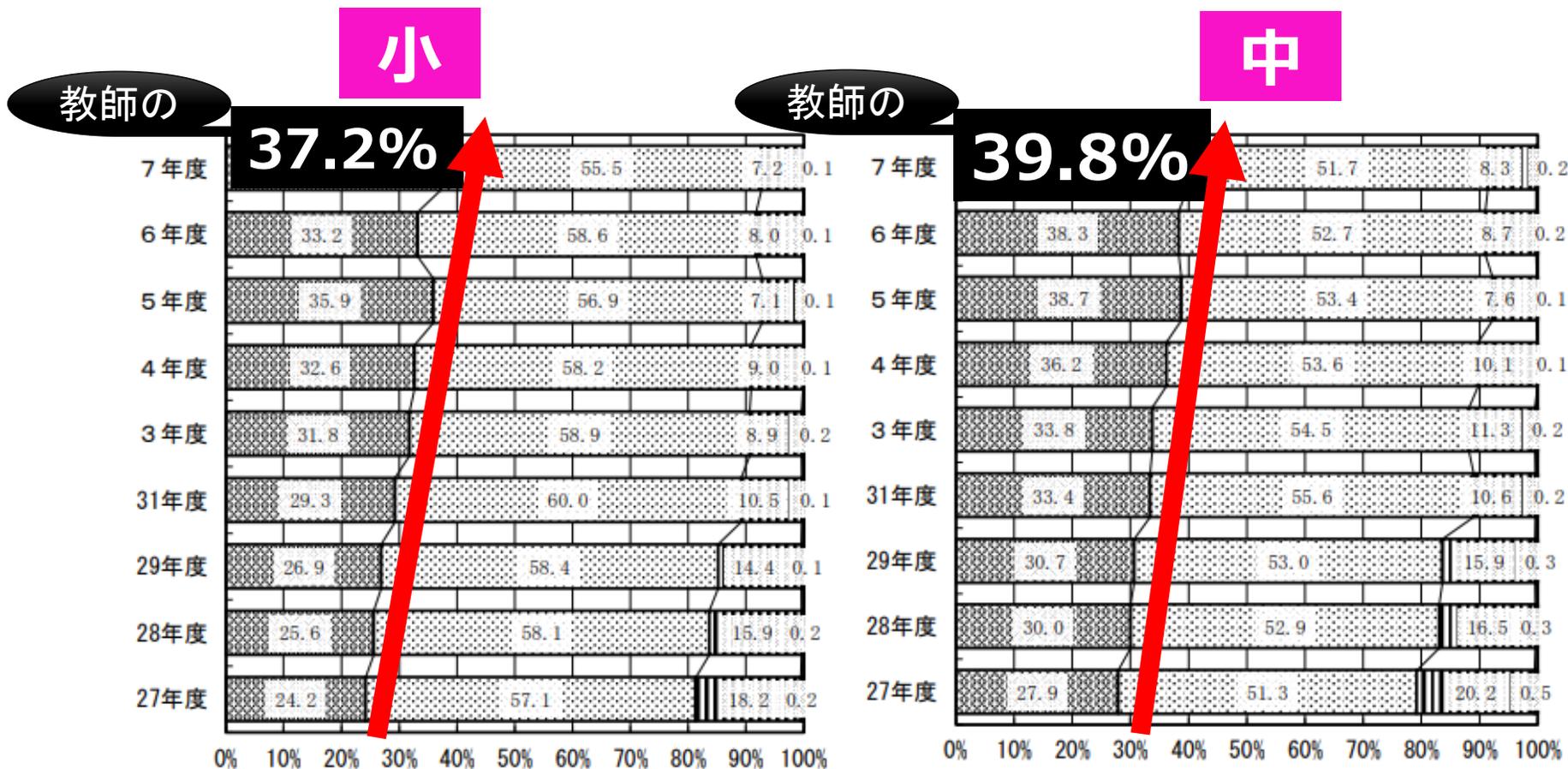
### ⑪ 生徒エージェンシー（STUDENT AGENCY）

- （略） 子どもたちに自身の学びに対するオーナーシップを感じられるようにします。子どもは、権限を与えられ、エージェンシーを認められるとき、何をいつ、そしてどのように学ぶのかに関して影響を与え、決定することができるようになり、それぞれの将来に向けて意味のある力を身につけるのです。

A decorative graphic on the left side of the slide features two overlapping circles. The upper circle is light blue with a white center, and the lower circle is light purple with a white center. A horizontal line, composed of overlapping translucent bands in shades of blue and purple, extends from the right side of the circles across the middle of the slide.

## 2. 現状・課題に関すること

# 探究の過程を意識した指導を 「よくしている」教師は増加傾向（3～4割） （「どちらかといえば、よくしている」を含めると9割超）



【出典】令和7年度全国学力・学習状況調査報告書(質問調査)P. 70

正確な質問は「調査対象学年の児童生徒に対して、総合的な学習の時間において、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導をしていますか」

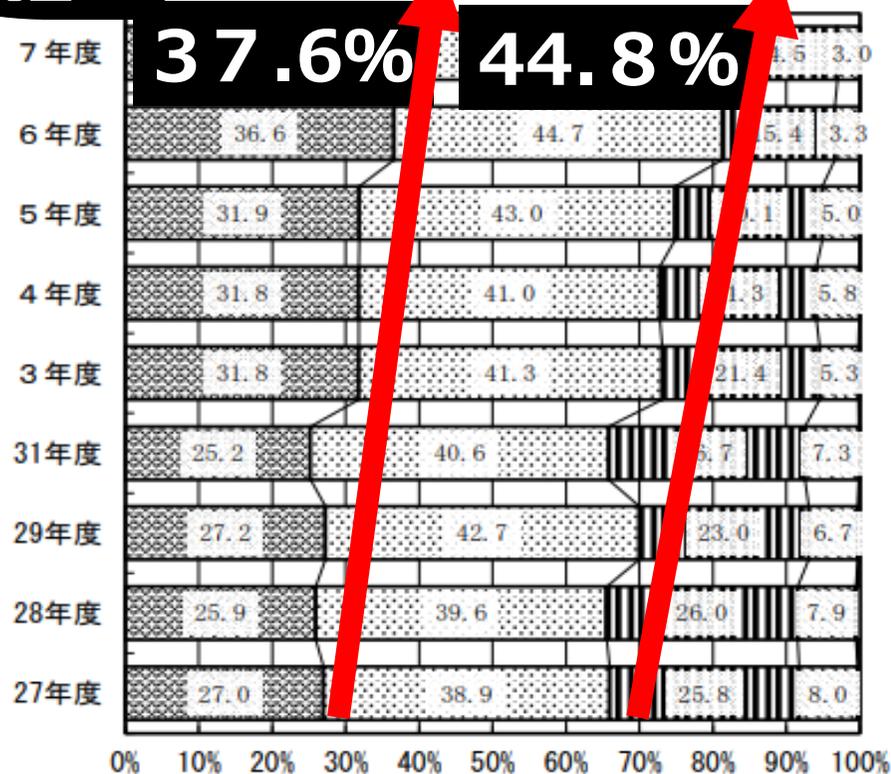
# 探究的な学習活動に取り組んでいますか？

## 「当てはまる」児童生徒は増加傾向（3～4割）

（「どちらかといえば、当てはまる」を含めると8割超）

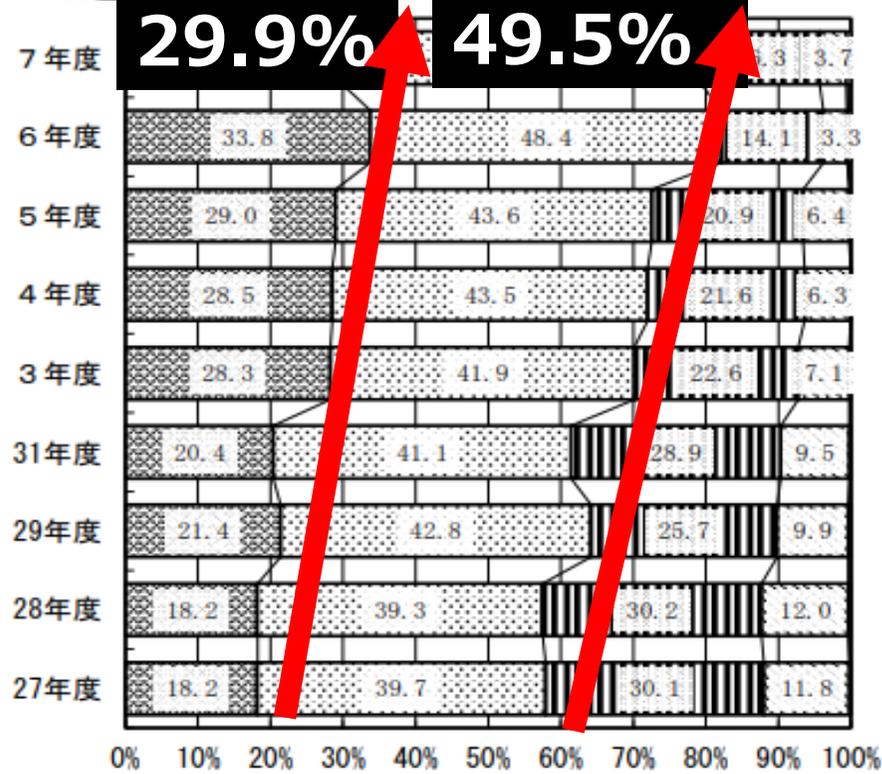
小

児童の



中

生徒の



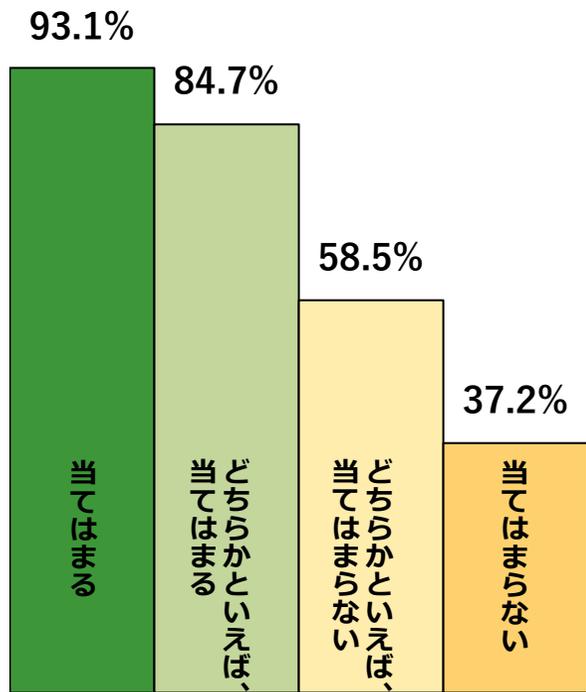
【出典】令和7年度全国学力・学習状況調査報告書（質問調査）P. 35

正確な質問は「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」

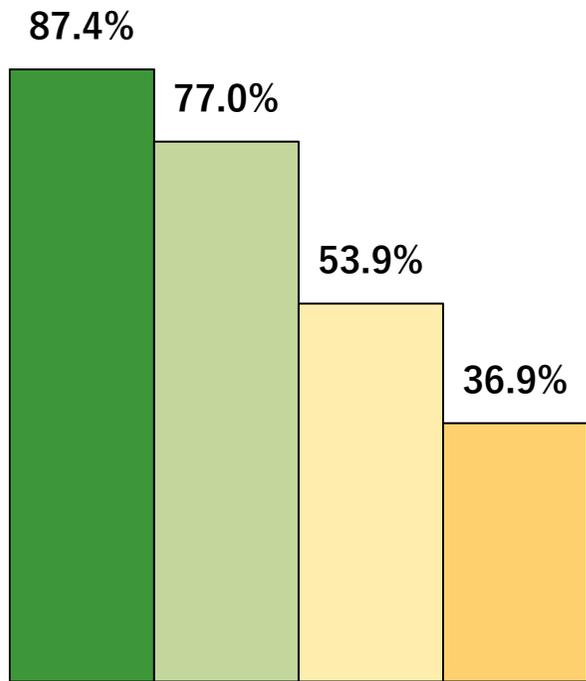
「探究的な学び」に取り組む児童生徒は、授業で学んだことを「次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりできる」割合が多い傾向

「学んだことを次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができる」という質問項目に肯定的に回答している児童生徒の割合

小学校



中学校



総合で探究的に学んでいる

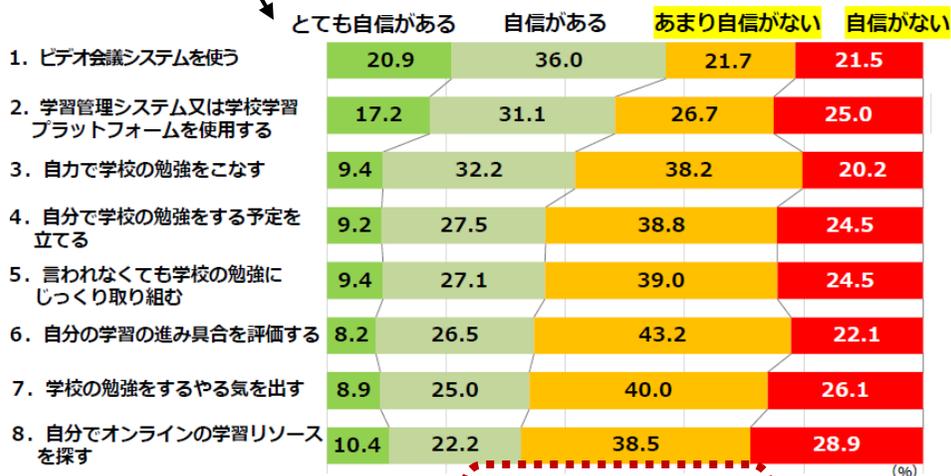
「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」

※傾向とは、事実関係を記述したものであり、因果関係を示すものではない。

## 「探究的な学び」に取り組む児童生徒は、「自分で学び方を考え、工夫できる」割合が多い傾向

### 全般的な傾向 (自律的に学ぶ自信がない)

「学校が再び休校になった場合に自律学習を行う自信があるか」という質問項目に回答している生徒の割合

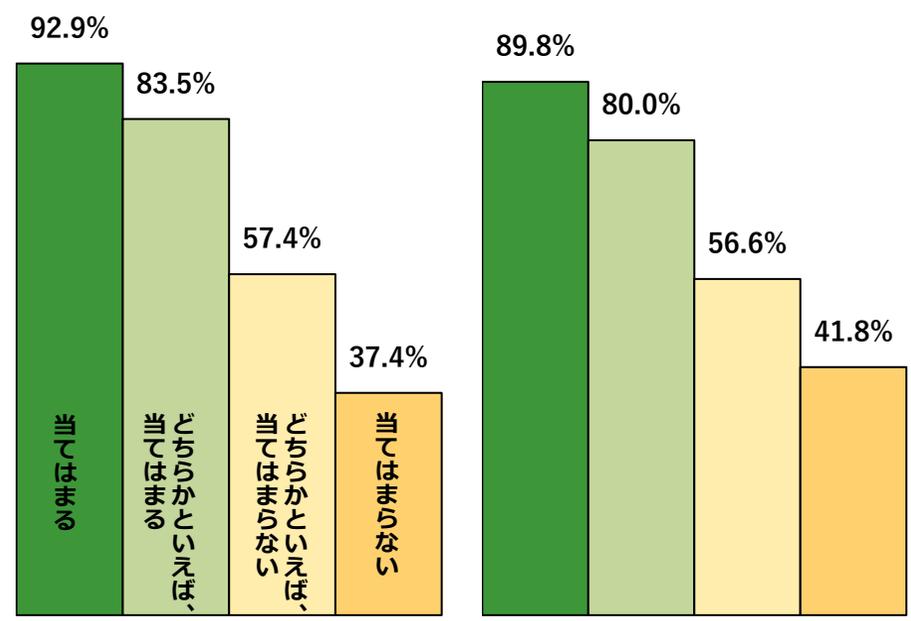


OECD平均	0.01
日本(34/37位)	-0.68

上記8項目を指標化して比較  
※OECD加盟国37か国の平均値が0.0、標準偏差が1.0となるよう標準化されており、値が大きいほど、自律学習に対する自己効力感(自信)が高い。

「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができる」という質問項目に肯定的に回答している児童生徒の割合

### 小学校 中学校



### 総合で探究的に学んでいる

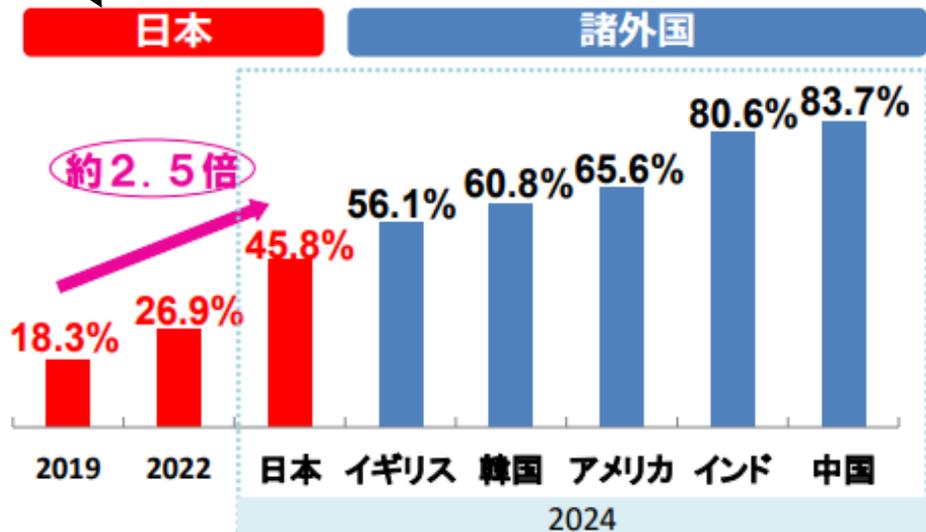
「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」

※傾向とは、事実関係を記述したものであり、因果関係を示すものではない。

## 「探究的な学び」に取り組む児童生徒は、「地域を良くするために何かしてみたいと思う」割合が多い傾向

全般的な傾向  
(社会参画意識は改善傾向だが依然課題)

「自分の行動で国や社会を変えられ  
と思う」(※1) という質問項目に  
回答している児童生徒の割合

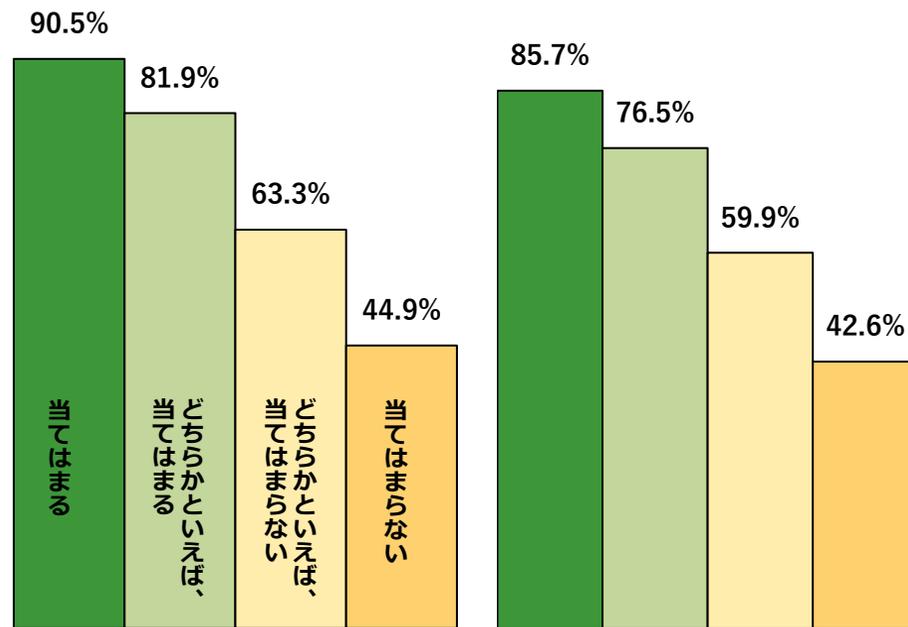


(※1)「同意」、「どちらかといえば同意」の回答率

「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」という  
質問項目に肯定的に回答している児童生徒の割合

小学校

中学校



総合で探究的に学んでいる

「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、  
調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」

※傾向とは、事実関係を記述したものであり、因果関係を示すものではない。

(出典) 令和7年度全国学力・学習状況調査をもとに作成 23

# 「探究的な学び」に取り組む児童生徒は「教科の勉強が好き」な割合が多い傾向

## 小学校

## 中学校

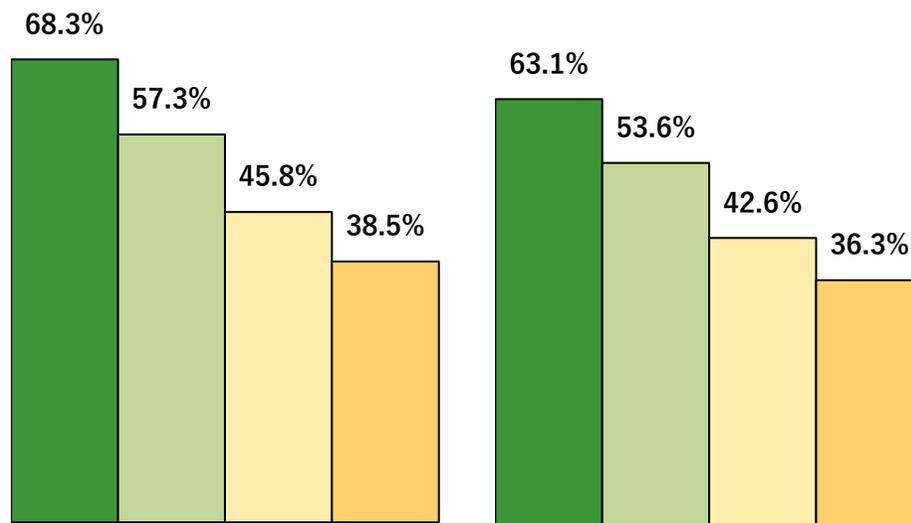
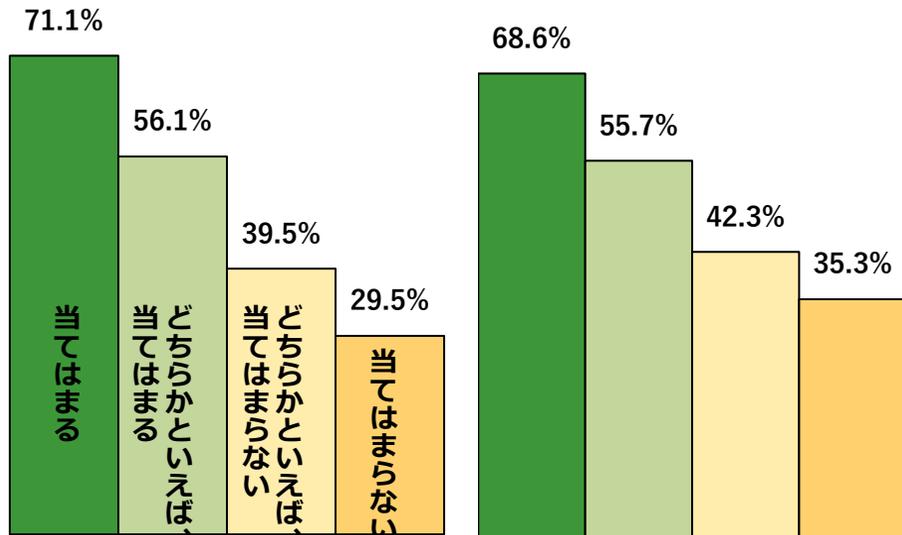
国語

算数

国語

数学

「教科の勉強が好き」という質問項目に肯定的に回答している児童生徒の割合



### 総合で探究的に学んでいる

「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」

※傾向とは、事実関係を記述したものであり、因果関係を示すものではない。

(出典) 令和7年度全国学力・学習状況調査をもとに作成 24

# 「探究的な学び」に取り組む児童生徒は、「平均正答率」が高い傾向

## 小学校

## 中学校

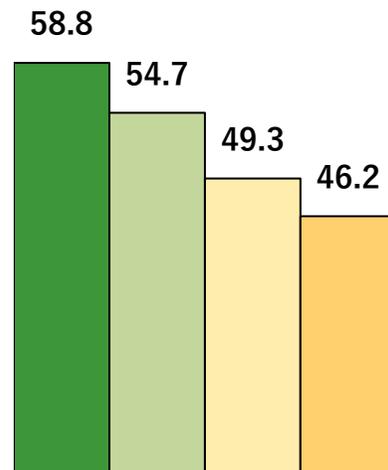
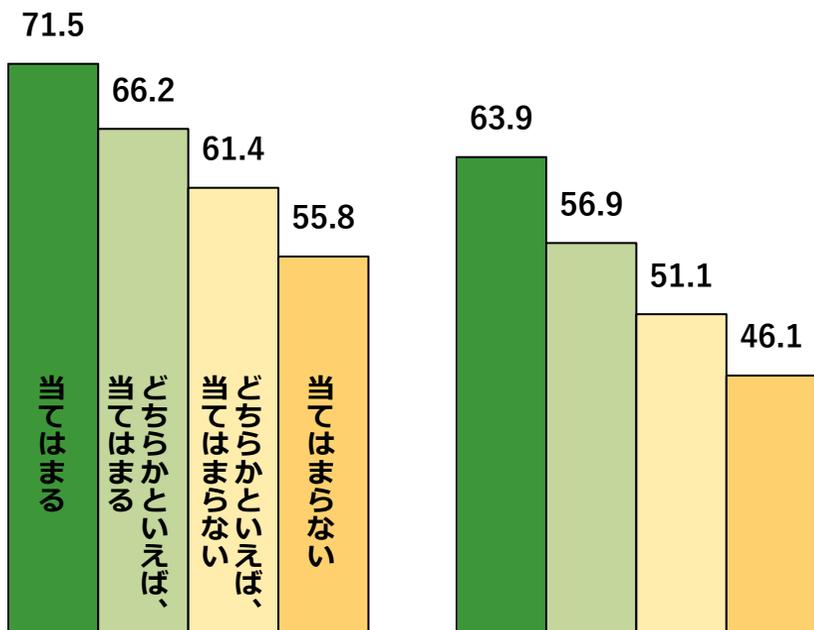
国語

算数

国語

数学

平均正答率



総合で探究的に学んでいる

「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」

※傾向とは、事実関係を記述したものであり、因果関係を示すものではない。

【出典】令和7年度全国学力・学習状況調査

# 令和4年度 小学校学習指導要領実施状況調査の結果について (総合的な学習の時間) 一質問調査版一

## 1. 平成29年学習指導要領の主な改訂のポイント

- 総合的・横断的な学習を通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指すことを明確化。
- 探究の過程(「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」)のうち、「整理・分析」、「まとめ・表現」に課題が見られたことを踏まえ、言語により分析し、まとめたり表現したりする学習活動(「考えるための技法」の活用を含む。)等を明確化。

## 2. 学習指導要領実施状況調査から明らかとなった成果と課題

- 児童質問紙調査では、前回調査で課題とされていた「整理・分析」「まとめ・表現」は、今回調査では肯定的な回答がそれぞれ70%以上である。
- 「課題の解決に向けて、友達や地域の人と進んで関わっている」ことについて肯定的な回答が70%を下回っており、他より低い傾向にある。
- 教師オンライン質問調査では全体的に肯定的な回答が80%以上であるが、資質・能力の育成に向けた指導計画の位置付けや指導と評価の一体化に関する質問では「そうしている」という回答が30%を下回っている。
- 4年生以上の児童においては、「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の学習過程について肯定的に回答している児童と多くの教科のペーパーテストの平均通過率等との相関が見られる。
- 総合的な学習の時間の全質問項目と共通質問における自己肯定感、協働、粘り強く課題に取り組む態度に関わる質問との相関が見られる。

## 3. 2の成果と課題を踏まえた改善の方向性

- 指導上の改善点
  - ・課題の解決に向けて、他者と協働して主体的に学ぶことや、地域と連携した学習活動を積極的に取り入れることを促す。
  - ・よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成するために指導と評価の一層の充実を図る。

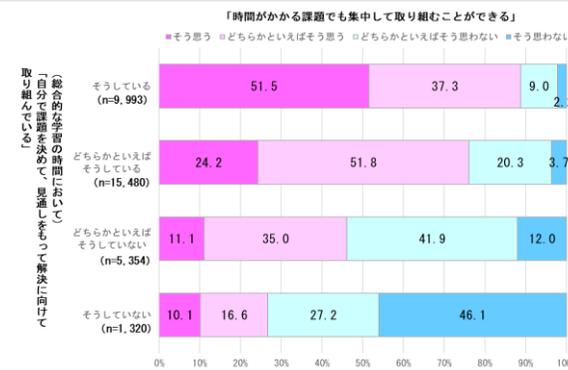
## 4. 調査結果例 (質問調査 小学校/児童)

集めた情報を比べたり、分けたり、つなげたりしながら、整理して考えている。

自分の考えを相手や目的に合わせて、分かりやすくまとめたり発表したりしている。



## 第6学年の総合的な学習の時間の質問と粘り強く課題に取り組む態度に関わる質問との相関※他学年も同様



相関係数  
0.50

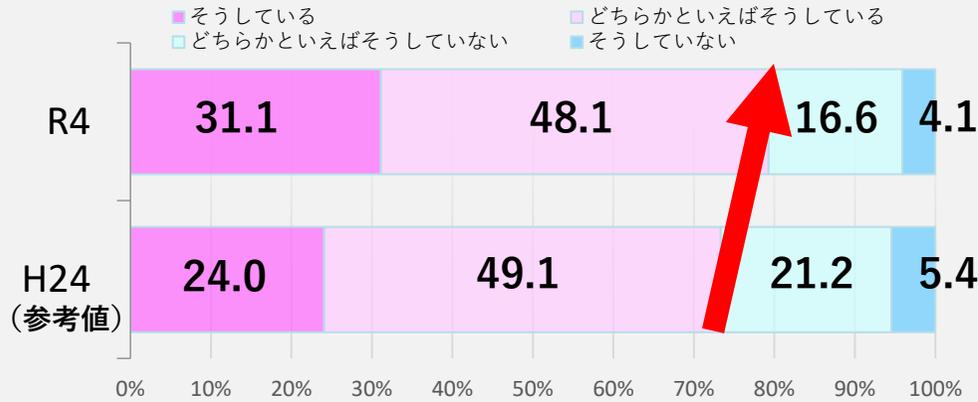
【学習指導要領実施状況調査から明らかとなった成果】

- 児童質問紙調査では、前回調査で課題とされていた「整理・分析」「まとめ・表現」は、今回調査では肯定的な回答がそれぞれ70%以上である。探究の過程に関する質問項目は前回調査の類似質問の結果と比べて改善傾向が見られる。

【調査結果例 (質問調査 小学校/児童)】

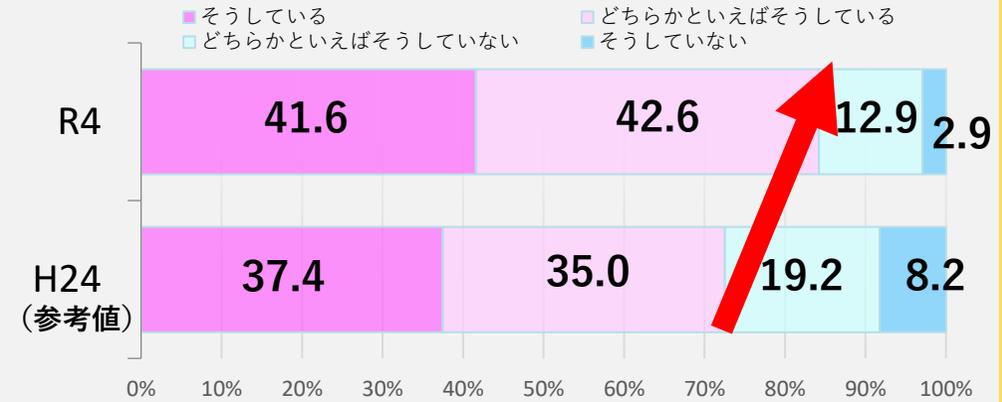
課題の設定 (第6学年)

自分で課題を決めて、見通しをもって解決に向けて取り組んでいる



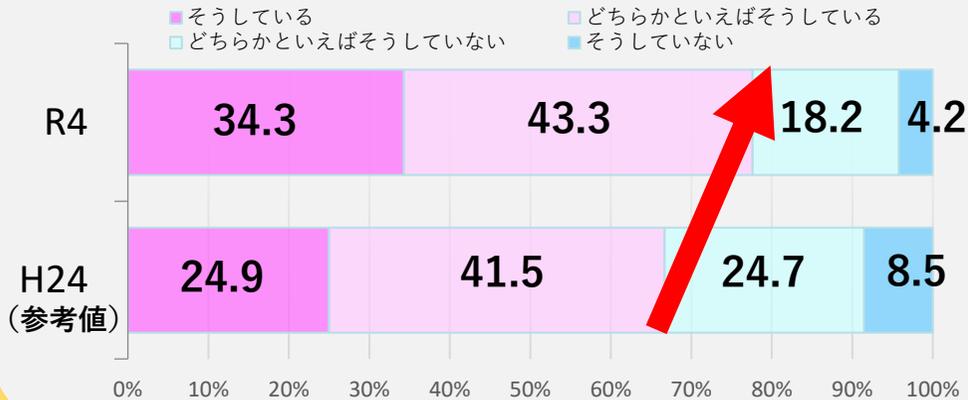
情報の収集 (第6学年)

課題や目的に合った方法を選んだり、いろいろな方法で情報を集めたりしている



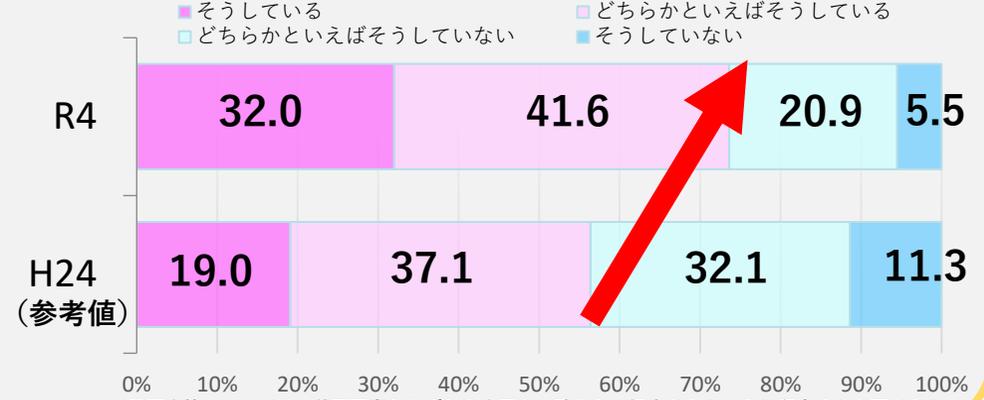
整理・分析 (第6学年)

集めた情報を比べたり、分けたり、つなげたりしながら、整理して考えている



まとめ・表現 (第6学年)

自分の考えを相手や目的に合わせて、わかりやすくまとめたり発表したりしている



※設問文等については、前回調査と必ずしも文言が一致しない場合があることに留意する必要がある。

【学習指導要領実施状況調査から明らかとなった成果】

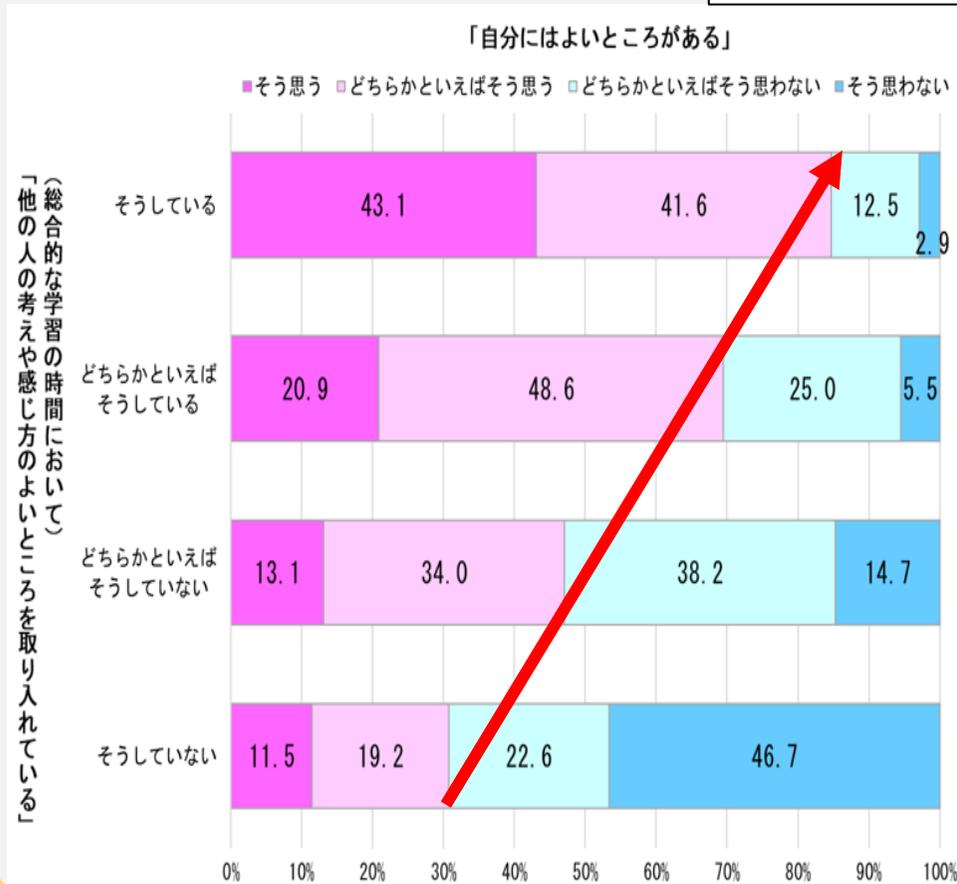
- 児童質問調査では、総合的な学習の時間の全質問項目と共通質問における自己肯定感、協働、粘り強く課題に取り組む態度に関わる質問との相関が見られる。

【調査結果例 (質問調査 小学校/児童)】

「他者理解」と「自己肯定感 (自分のよさ)」に関わる質問とは相関がある (第6学年)

※他学年も同様

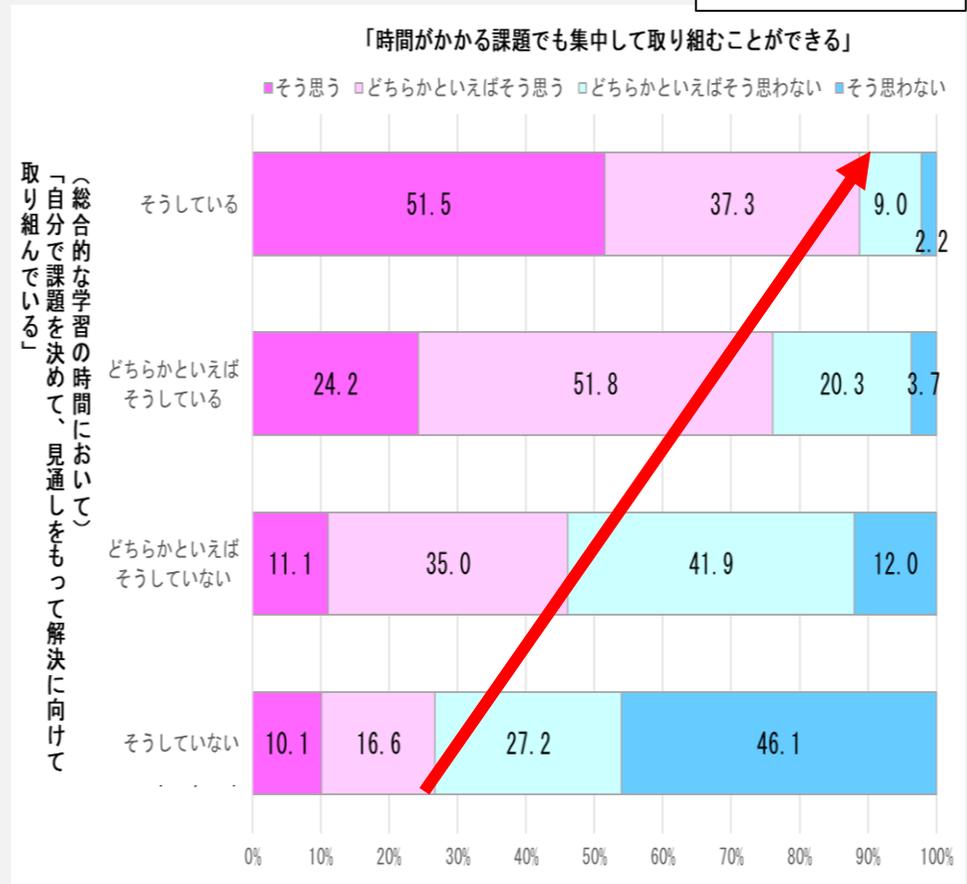
相関係数 0.35



「課題の設定」と「粘り強さ」に関わる質問とは相関がある (第6学年)

※他学年も同様

相関係数 0.50



# 令和5年度 中学校学習指導要領実施状況調査の結果について (総合的な学習の時間) 一質問調査版 —《速報版》

## 1. 平成29年学習指導要領の主な改訂のポイント

- 総合的・横断的な学習を通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指すことを明確化。
- 探究の過程（「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」）のうち、「整理・分析」と「まとめ・表現」に課題が見られたことを踏まえ、言語により分析し、まとめたり表現したりする学習活動（「考えるための技法」の活用を含む。）等を明確化。

## 2. 学習指導要領実施状況調査から明らかとなった成果と課題

- 生徒質問調査では、前回調査で課題とされていた「整理・分析」「まとめ・表現」は、今回調査では肯定的な回答がそれぞれ75%以上である。探究の過程に関する質問項目は前回調査の類似質問の結果と比べて改善傾向が見られる。
- 教師質問調査では、ほとんどの項目において肯定的な回答が70%以上であり、特に、他者と協働して主体的に取り組む探究的な学習に関する質問においては肯定的な回答のうち「そうしている」の割合が45%程度であり、他の項目と比べて高い。小学校との接続を意識した年間指導計画の作成に関する質問においては肯定的な回答のうち「そうしている」の割合が10%程度であり、他の項目と比べて低い。
- 総合的な学習の時間の全質問項目と共通質問における自己肯定感、協働、粘り強く課題に取り組む態度、筋道を立てて考えること、情報の収集・活用に関わる質問に相関が見られる。

## 3. 2の成果と課題を踏まえた改善の方向性

- 指導上の改善点
  - ・目標及び内容、学習活動などが、中学校の学年に応じて発展していくことができるよう、指導計画の作成等にあたり、学校種間、学年間の連携を図る。
  - ・各教科等の資質・能力や学習の基盤となる資質・能力を活用・発揮できるように、指導と評価の一体化の一層の充実を図る。

## 4. 調査結果例 (質問調査 中学校/生徒)

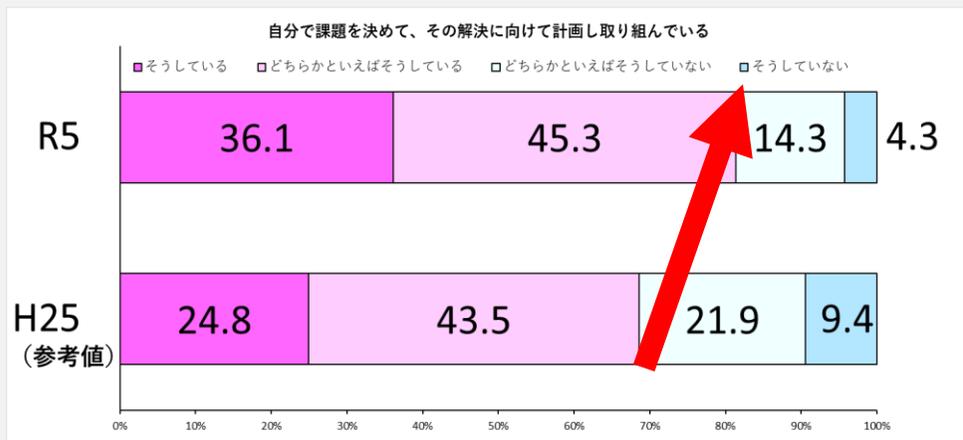


【学習指導要領実施状況調査から明らかとなった成果】

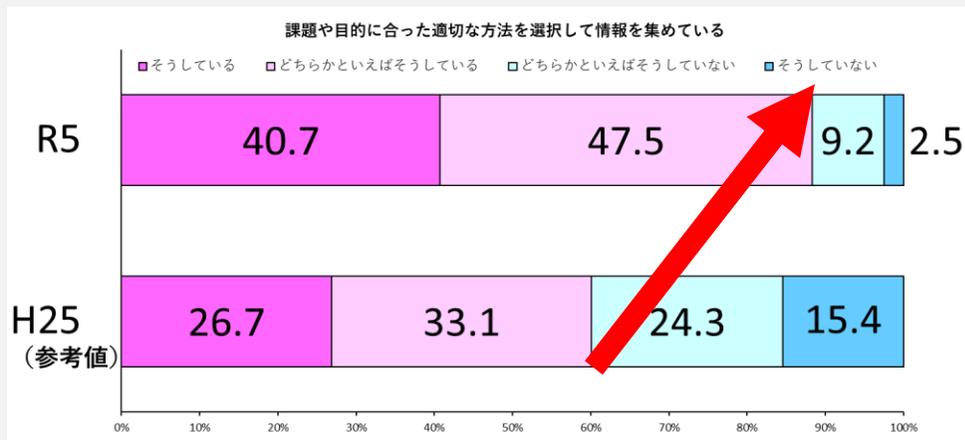
- 生徒質問調査では、前回調査で課題とされていた「整理・分析」「まとめ・表現」は、今回調査では肯定的な回答がそれぞれ75%以上である。探究の過程に関する質問項目は前回調査の類似質問の結果と比べて改善傾向が見られる。

【調査結果例 (質問調査 中学校/生徒)】

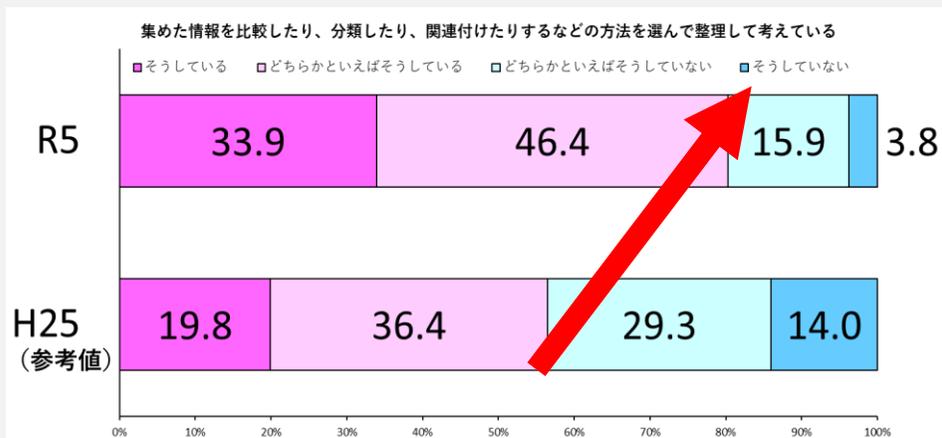
課題の設定 (第3学年)



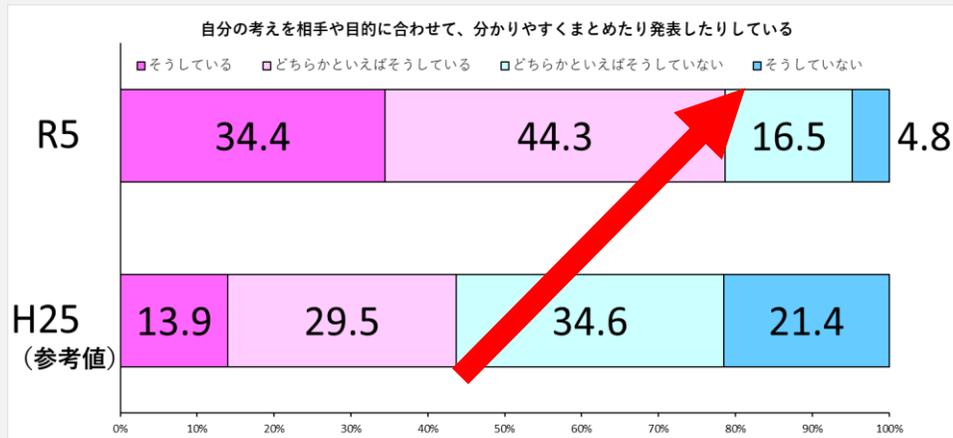
情報の収集 (第3学年)



整理・分析 (第3学年)



まとめ・表現 (第3学年)



※設問文等については、前回調査と必ずしも文言が一致しない場合があることに留意する必要がある。

【学習指導要領実施状況調査から明らかとなった成果】

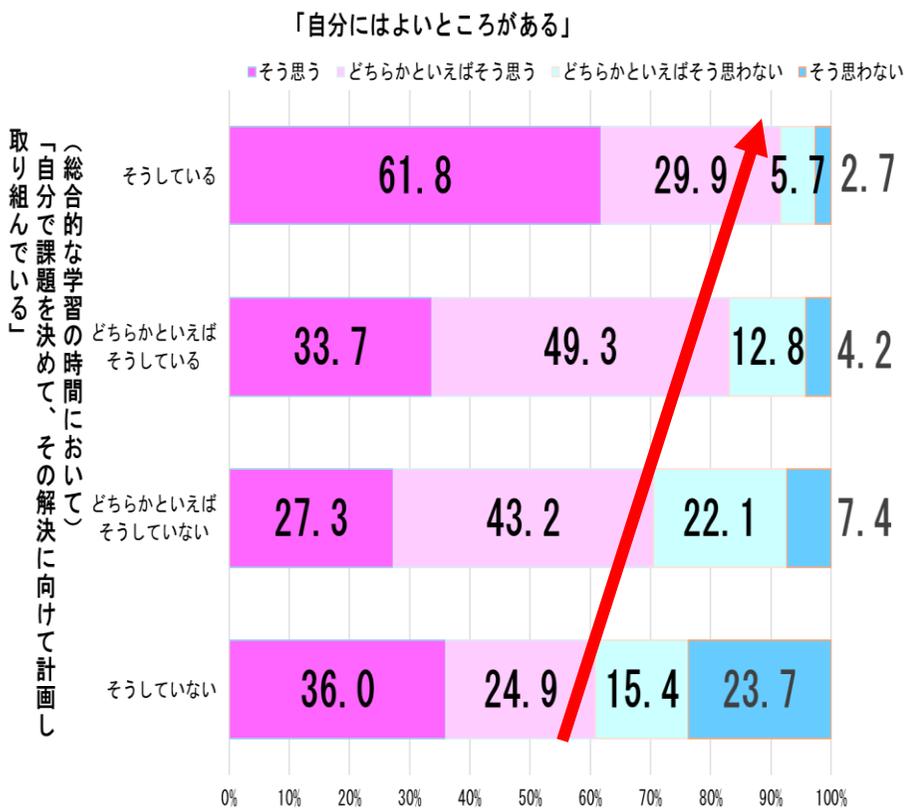
- 生徒質問調査では、**総合的な学習の時間の全質問項目と共通質問における自己肯定感**、協働、粘り強く課題に取り組む態度、物事を筋道立てて考えること、情報の収集・活用**に関わる質問との相関**が見られる。

【調査結果例 (質問調査 中学校/生徒)】

「課題の設定」と「自己肯定感 (自分のよさ)」に  
関わる質問とは相関がある (第3学年)

※他学年も同様

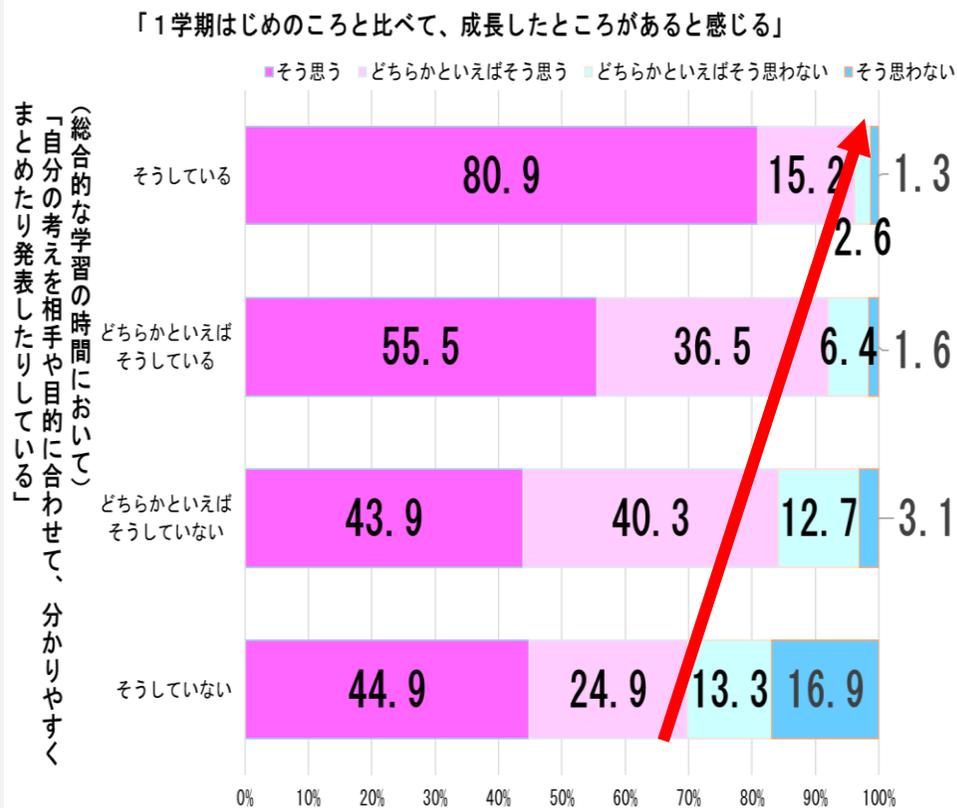
相関係数 0.35



「まとめ・表現」と「自己肯定感 (自分の成長)」に  
関わる質問とは相関がある (第3学年)

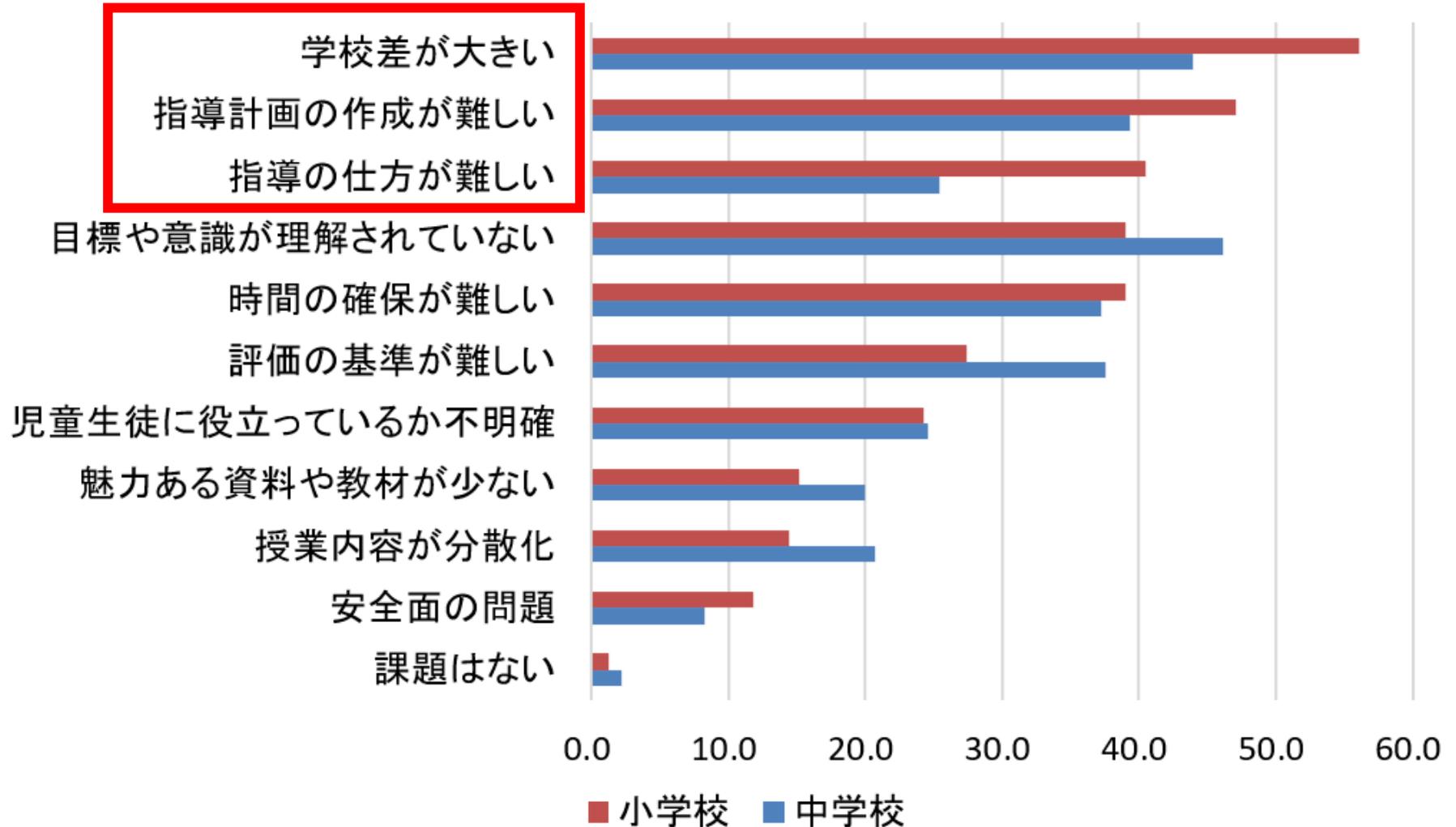
※他学年も同様

相関係数 0.39



## 総合的な学習の時間に関する課題（小中学校教員）

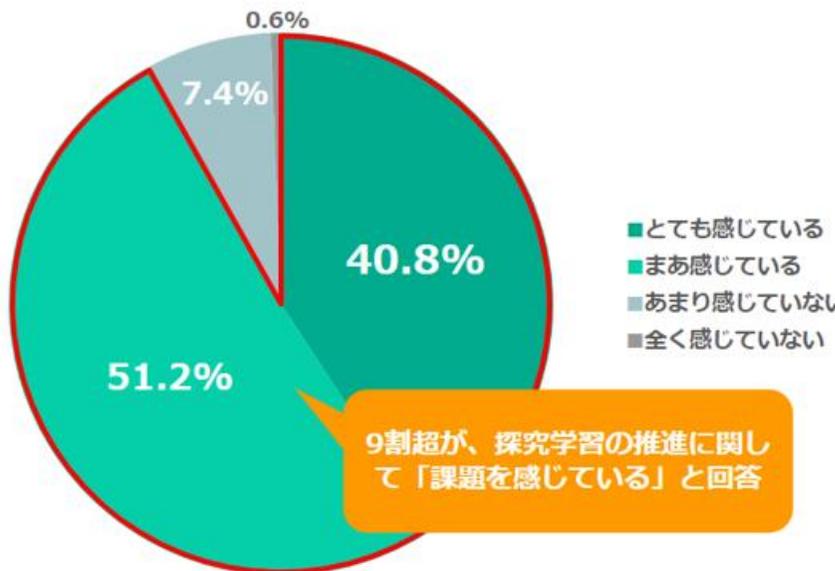
学校差が大きい、指導計画の作成が難しい、指導の仕方が難しい等の課題感があるとの調査結果



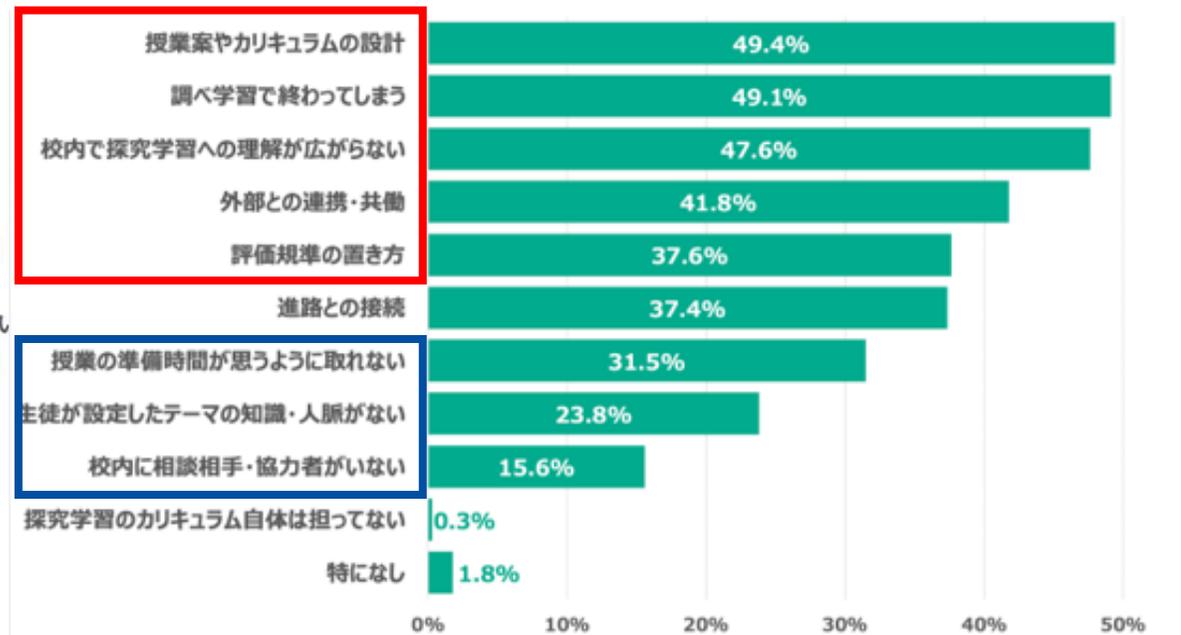
# 総合的な学習の時間に関する課題（高校教員）

探究に関わる高校教員の9割超が「課題を感じている」と回答し、特にカリキュラムの設計や、調べ学習で終わってしまう等の課題があるとの調査結果

探究学習の推進について、どの程度課題を感じていますか？



探究学習の推進について、特に課題だと感じるのはどのようなことですか？



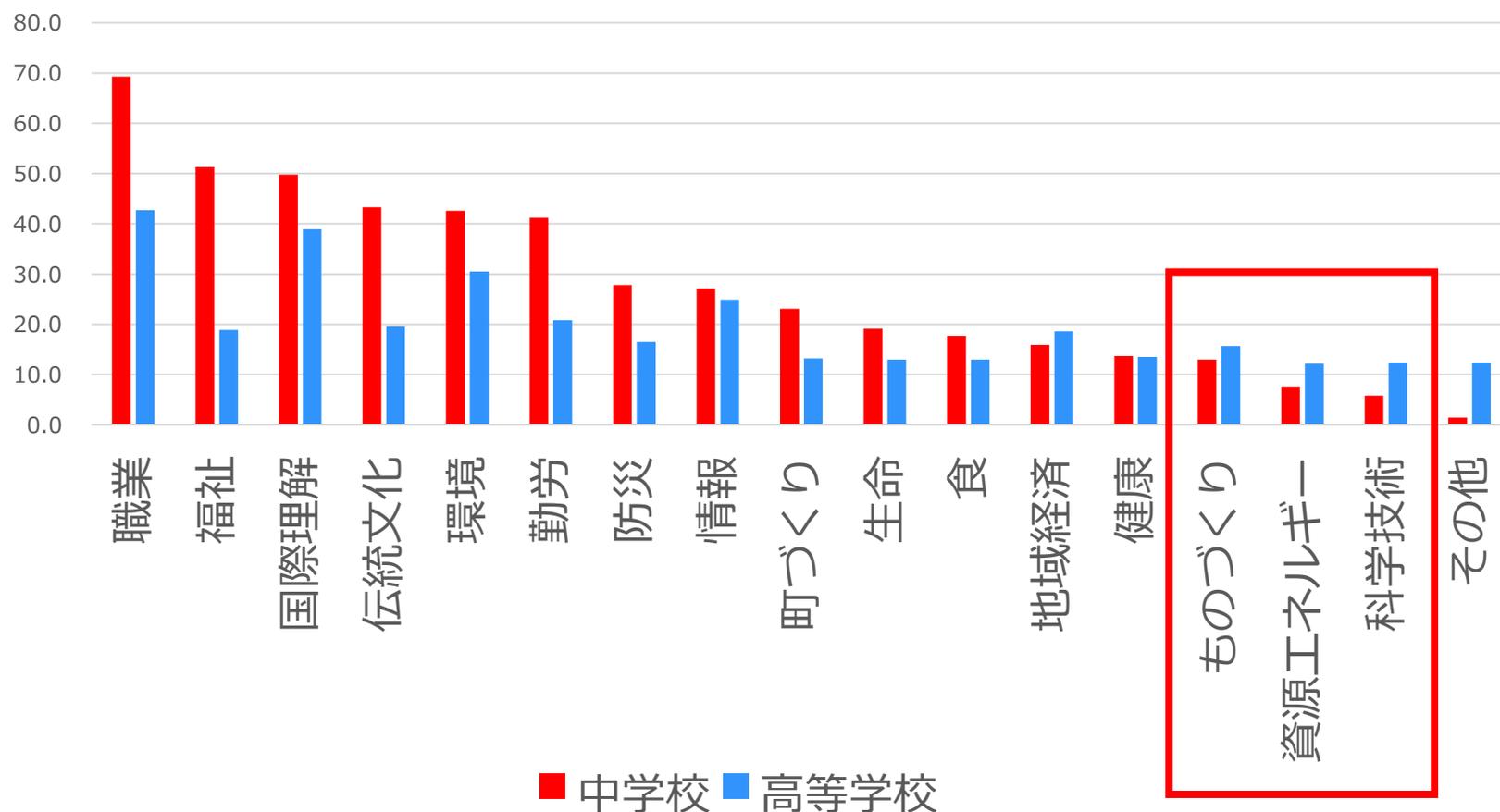
(出典) 特定非営利活動法人カタリバによる調査結果2023

(対象: 生徒たちの探究学習をサポートしている高校教員340名)

## 総合的な学習の時間に関する課題（高校教員）

テーマ設定に関して、「ものづくり」「資源エネルギー」「科学技術」など、サイエンスに関するものが少ないとの調査結果

### 探究学習の授業でよく取り扱うテーマ（中高別）



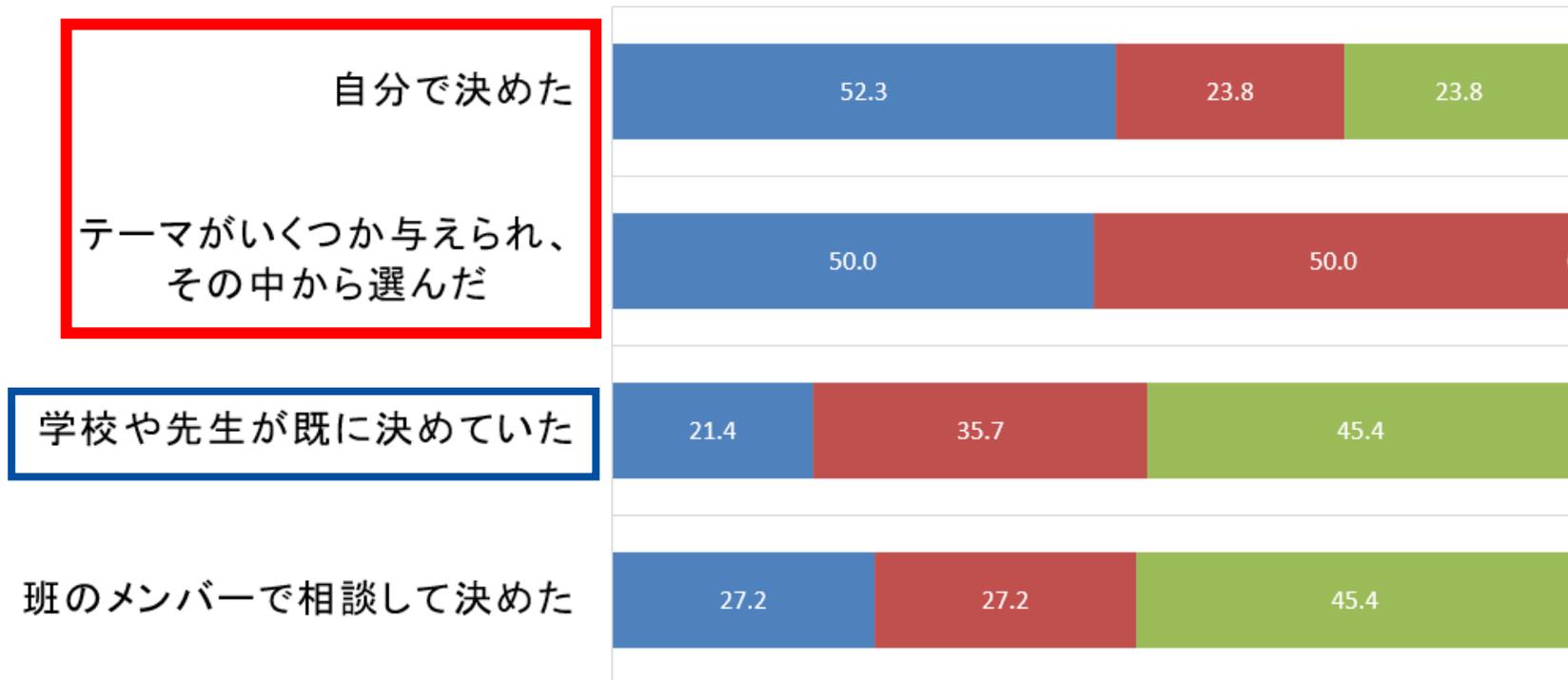
# 探究テーマの設定とキャリア観の関係

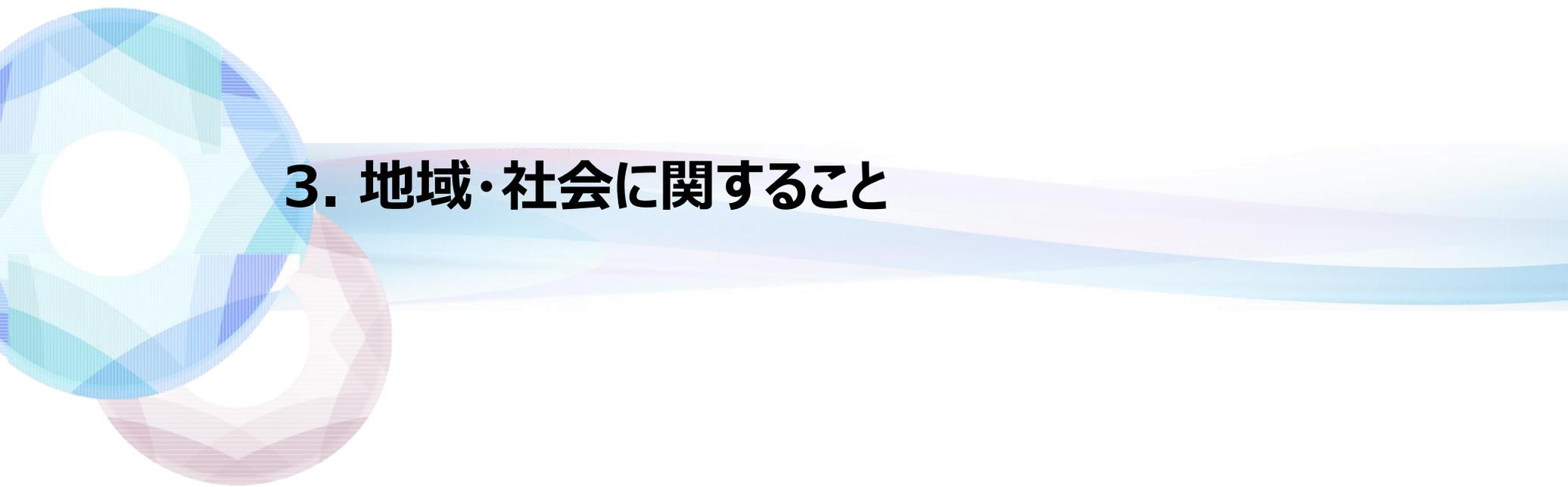
探究テーマを自分で決めた・選んだ場合に、  
探究活動が将来のキャリア形成により大きな影響を与えるとの調査結果

## テーマの決め方とキャリア観の関係

【質問】 探究活動が将来のキャリア選択に影響を与えましたか？

■ はい ■ いいえ ■ わからない



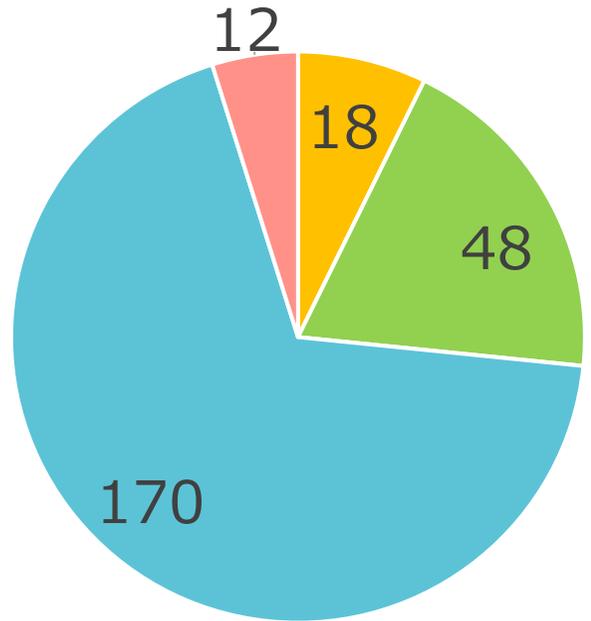
A decorative graphic on the left side of the slide. It features two overlapping circles: a larger one in shades of blue and teal, and a smaller one in shades of purple and pink. A horizontal line with a gradient from light blue to light purple extends from the right side of the blue circle across the middle of the slide.

### 3. 地域・社会に関すること

# 文部科学省における「探究」に係るイベントの調査の実施

- 都道府県等教育委員会が主催する「探究」に係るイベントについて、令和6年8～9月に調査を実施
- 調査結果は、文部科学省後援の民間主催のイベントと併せて、ホームページに一覧を公開

掲載件数：248件



- 民間団体
- 大学等
- 都道府県又は指定都市教育委員会
- 府省庁（所管法人含む）

(掲載内容：名称、概要、対象など)

No.	イベント名称	主催者	概要	対象	開催期間	開催場所	問い合わせ先	掲載日
1	探究 2024 〇〇県立大学	〇〇県立大学	〇〇県立大学が主催する探究イベント。2024年10月10日(土)に開催される。〇〇県立大学の学生が中心となり、〇〇県立大学の教員が講師を務める。〇〇県立大学の学生が中心となり、〇〇県立大学の教員が講師を務める。	〇〇県立大学の学生	2024年10月10日(土)	〇〇県立大学	〇〇県立大学 〇〇課	2024年9月10日
2	探究 STEAM Japan Award 2024	〇〇協会	STEAM教育の推進を目的として、2024年10月15日(土)に開催される。STEAM教育の推進を目的として、2024年10月15日(土)に開催される。	全国の小学生	2024年10月15日(土)	〇〇協会	〇〇協会 〇〇課	2024年9月10日
3	探究 UIC User Science & Engineering Challenge 2024	〇〇大学	UIC User Science & Engineering Challenge 2024。2024年10月20日(土)に開催される。UIC User Science & Engineering Challenge 2024。2024年10月20日(土)に開催される。	全国の大学生	2024年10月20日(土)	〇〇大学	〇〇大学 〇〇課	2024年9月10日
4	探究 〇〇県立大学探究フェスティバル 2024	〇〇県立大学	〇〇県立大学が主催する探究フェスティバル。2024年10月25日(土)に開催される。〇〇県立大学が主催する探究フェスティバル。2024年10月25日(土)に開催される。	〇〇県立大学の学生	2024年10月25日(土)	〇〇県立大学	〇〇県立大学 〇〇課	2024年9月10日
5	探究 探究フェスティバル 2024	〇〇協会	探究フェスティバル 2024。2024年10月30日(土)に開催される。探究フェスティバル 2024。2024年10月30日(土)に開催される。	全国の小学生	2024年10月30日(土)	〇〇協会	〇〇協会 〇〇課	2024年9月10日



リンク先

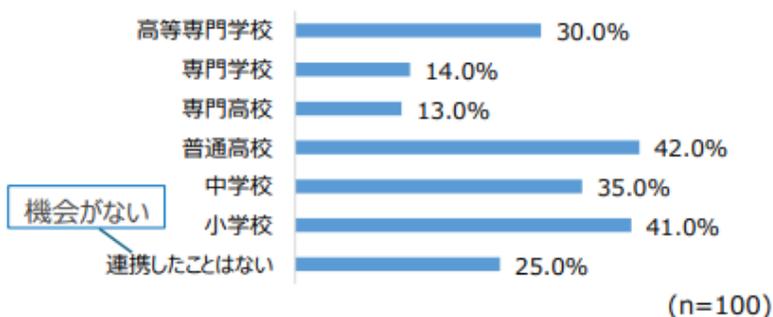
# 文部科学省後援の民間探究イベントの例

イベント名	主催	対象	リンク先
SDG s 探究AWARDS	一般社団法人 未来教育推進機構	中学生 高校生	
STEAM JAPAN AWARD	STEAM JAPAN	中学生 高校生	
SDG s QUEST みらい甲子園	SDGs QUEST みらい甲子園事務局	高校生	
Q-1 ～U-18が未来を変える★研究発表SHOW～	朝日放送テレビ	高校生	
高校生Ring	リクルート	高校生	
創造力、無限大∞ 高校生ビジネスプラン・グランプリ	日本政策金融公庫	高校生	

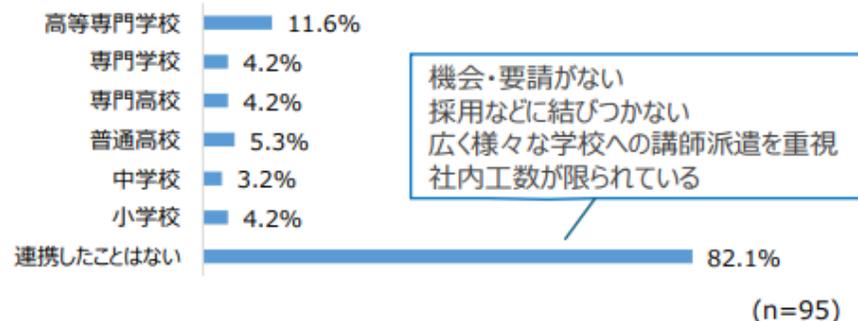
# 学校と企業との産学連携の実績等（経団連による調査結果）

- 過去5年間で、単発の授業等で講師として人材を派遣したことがある企業は75%。普通高校、小学校、中学校の順に多い。
- 過去5年間で、学期や年単位の授業等で中長期的に講師として人材を派遣したことがある企業は18%。主に高等専門学校と連携。
- 既に連携しており、今後拡大・維持するとの回答は、30%超。

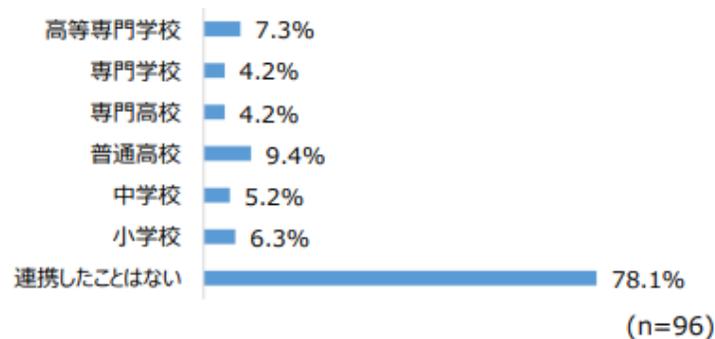
【過去5年間で、単発の授業等で講師として人材を派遣したことがある教育機関】



【過去5年間で、学期や年単位の授業等で中長期的に講師として人材を派遣したことがある教育機関】



【過去5年間で、産学連携で教育カリキュラムを作成したことがある教育機関】



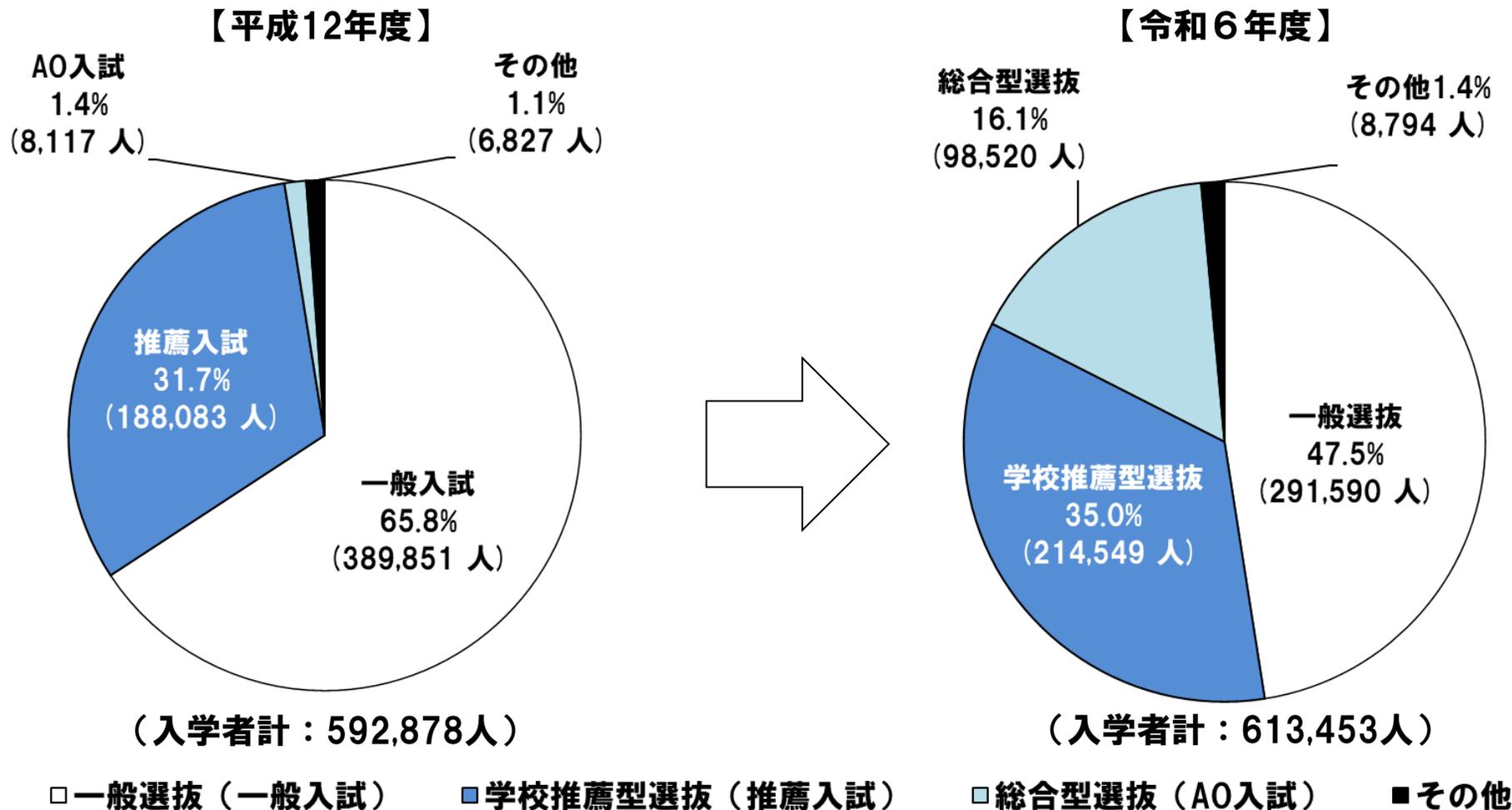
【連携したい理由】

- ウェルビーイング・持続可能な社会づくりへの貢献、地域貢献、社会貢献
- 将来のユーザー獲得
- 自社・業界の認知度向上、将来世代の働き手育成

※調査対象：経団連 教育・大学改革推進委員会、イノベーション委員会、雇用政策委員会 委員企業等(441社)  
 ※調査期間：2025年7月16日～8月20日  
 ※回答企業数：112社

# 大学入試の変化について

平成12年度(AO入試調査開始年度)に比べて、総合型選抜、学校推薦型選抜を経由した入学者が大きく増加しており、入試方法の多様化が進んでいる。



(注) 「その他」(平成12年度) : 専門高校・総合学科卒業生入試、社会人入試、帰国子女・中国引揚者等子女入試など  
 「その他」(令和6年度) : 専門学科・総合学科卒業生選抜、社会人選抜、帰国生徒・中国引揚者等生徒選抜及びその他選抜

# 高校入試の変化について

「高校教育の改革」「公立高校入試倍率の低下」等を背景に、各自治体が公立高校の入試改革を進めている。

## 広島県 2023年度～

- 推薦入試を廃止し、一般選抜に一本化
- 自己表現(自己表現カード+面接)を必須に
- 学力検査:調査書:自己表現=6:2:2
- 各学校独自の「特色枠」を設定可に(定員の50%以内)

## 愛知県 2023年度～

- 「特色選抜」を導入。(面接+作文 基礎学力検査 プレゼンテーション 実技検査 から1つ で選抜)
- 複数校志望制を導入。Aグループ、Bグループからそれぞれ第一志望、第二志望を選択。
- 面接の有無は各学校ごとに判断

## 大阪府 2026年度～

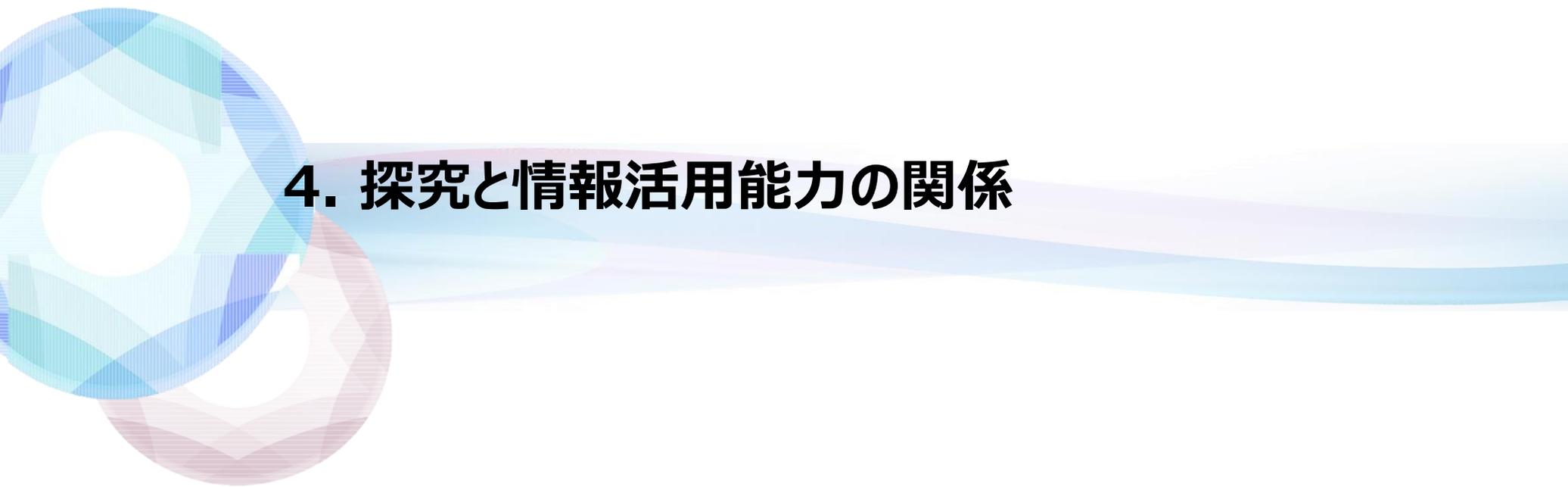
- ボランティア、探究活動、起業、クラブ活動などを重点的に評価する「特色枠」を新設
- 複数校志望制を導入。第一志望を不合格になっても、第二志望の選抜を受けられる。
- 入試日程の3月→2月への前倒し

## 埼玉県 2027年度～

- 自己評価資料の提出と面接をすべての受験生に求める
- 共通選抜(旧来の一般選抜)に加え、各高校の判断で「特別選抜」を実施できるようにする(学力検査・調査書・面接に加え、実技検査・小論文等の実施や学力検査等の傾斜配点を行うことができる)

全国的な趨勢としては「面接重視」「ペーパーテスト以外の評価重視」の方向。一方で、神奈川県のように従来必須としてきた面接をとりやめる動きもある(背景に面接の形骸化/学校ごとの取り扱いの格差)

(出所)小村俊平ベネッセHD経営企画推進本部長 発表資料をもとに作成

A decorative graphic on the left side of the slide features two overlapping circles. The upper circle is light blue with a white center, and the lower circle is light purple with a white center. A horizontal line with a light blue and purple gradient extends from the right side of the circles across the middle of the slide.

## 4. 探究と情報活用能力の関係

# 探究×ICTの活用で期待できる質の高まり



## ① 課題の設定

多様な課題に出会うことができる  
データ等で課題を明確化し、課題解決の見  
通しを鮮明にできる

## ② 情報の収集

多種多様な大量の情報を、高速に、時  
間や空間を超えて収集・蓄積できる

## ④ まとめ・表現

豊かな表現を短い時間で作成し、広く発信し  
たり、自らの学びを振り返ったりできる

## ③ 整理・分析

多様で大量で複雑な情報の整理や、整理  
した情報の加工・分析が容易になる



# 情報技術の活用により探究の学びの質を向上する取組

(渋谷区の例)

## 渋谷区教育委員会における取組 (授業時数特例校) ～探究×ICT～

- ◆渋谷区では、令和6年度より、未来社会に求められる、自ら課題を設定し、解決策を探る能力を育成するため、「シブヤ未来科」を大幅拡充。
  - ◆シブヤ未来科では、自ら考え判断して学び続ける「自己調整力」、多様な仲間と協働して新たな価値を生み出す「創造力」、自分が思い描く未来を実現しようとする「挑戦力」の育成を目指している。
  - ◆授業時数特例校制度を活用し、同制度の上限である各教科の時数のうち1割を総合的な学習の時間に当て、午後は探究「シブヤ未来科」の時間としている。
- ※総合的な学習の時間が70時間 → 155時間 (小学校6年)
- ◆シブヤ未来科の実施に当たっては、本区が全国に先駆けて整備を進めてきたICT環境をフル活用している。



### 探究の道具としてのICT

探究における課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の各段階でMicrosoft365等を活用。



### 探究を支援するアプリ

探究支援アプリInspire Highを導入し、世界で活躍する人物とのセッションや、日本中の生徒と高め合う機会を提供。



区独自のハチアプリを使い、探究の振り返りや子供同士のフィードバックが可能に。



### 教員への支援

探究ハンドブックを作成し、タブレットで活用できるワークシートも配布。



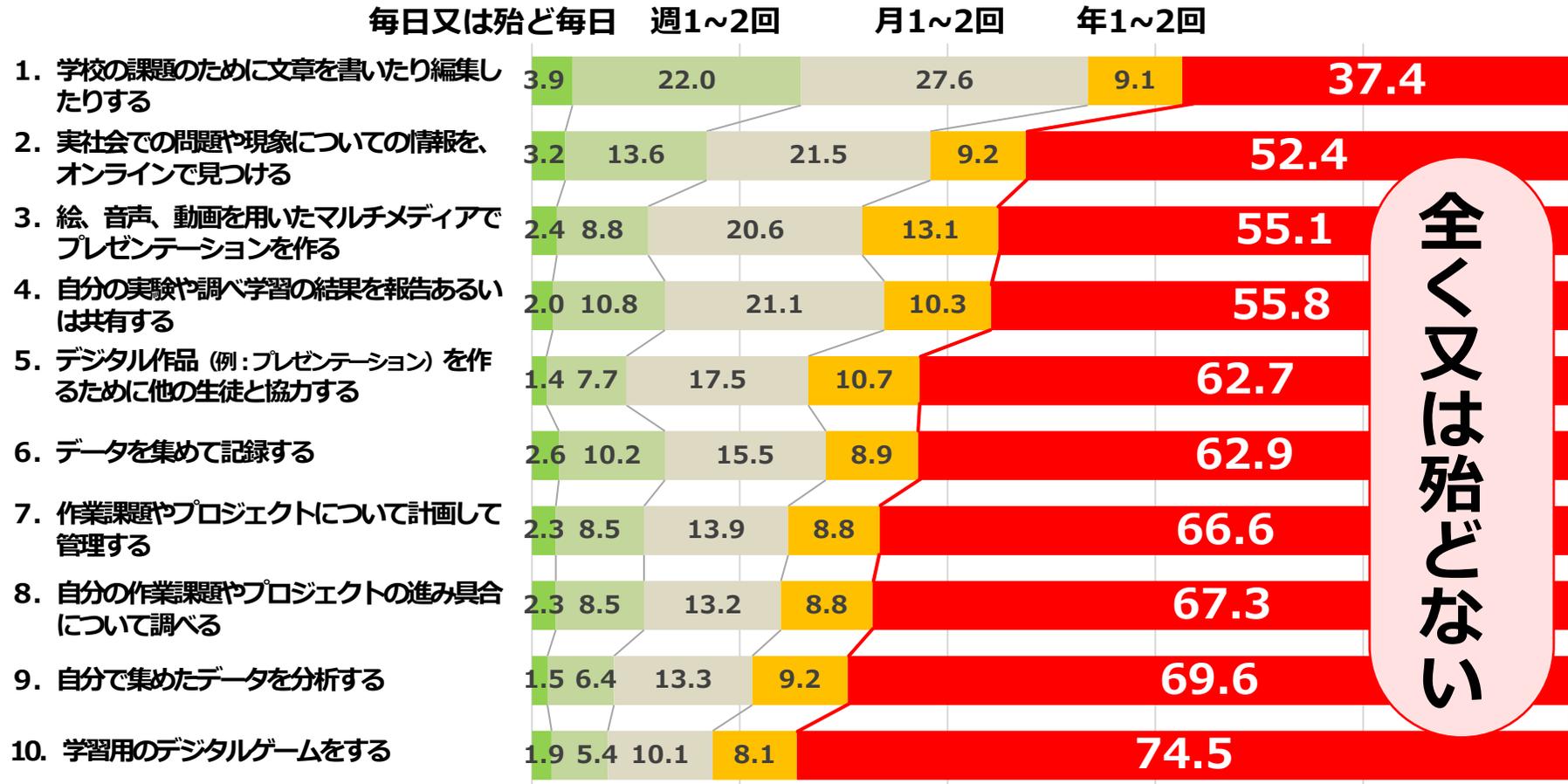
企業・団体とのマッチング支援のため、探究ポータルサイトを開設。



# 生徒・教師を対象とする調査の結果

PISA2022

## 探究の学びにおけるICT活用 諸外国と比較して低位であり、伸びしろがある



全く又は殆どない



上記10項目を指標化して比較すると…

※ ICT活用調査に参加したOECD加盟国29か国の平均値が0.0、標準偏差が1.0となるよう標準化されており、その値が大きいほど、ICTを用いた探究型の教育の頻度が高いことを意味している。

OECD平均	0.01
日本(29/29位)	-0.82

# 1人1台端末の活用の探究的な学習への質的・効率的影響についての調査 (学会等未発表データ, 速報値)

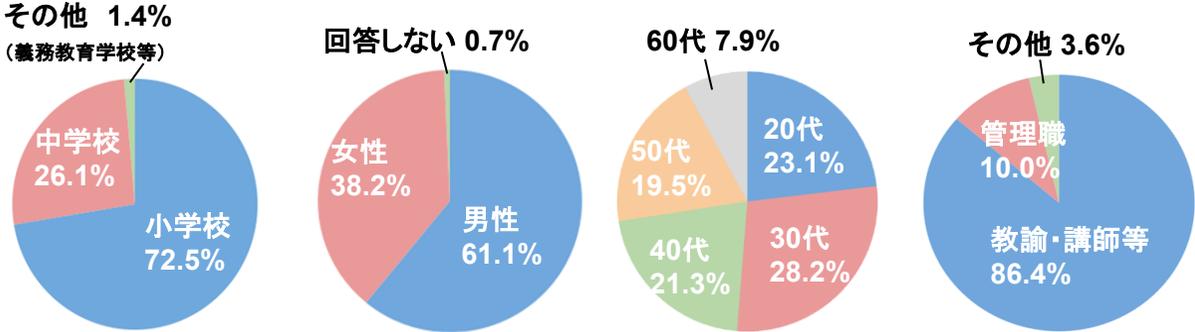
調査対象

全国の公立・私立の小学校・中学校に在籍する教師

回収数

回答数 279人

調査回答者の属性



調査方法・調査項目

- Webフォームによる。フェイス項目 (9項目)
- ① 端末がないとできない探究的な活動の時短への影響を問う (14項目)
  - ② 端末がないとできない探究的な活動の学習の質への影響を問う (14項目)
  - ③ 端末がなくてもこれまでも行われてきた探究的な活動に対する端末の時短への影響を問う (40項目)
  - ④ 端末がなくてもこれまでも行われてきた探究的な活動に対する端末の学習の質への影響を問う (40項目)

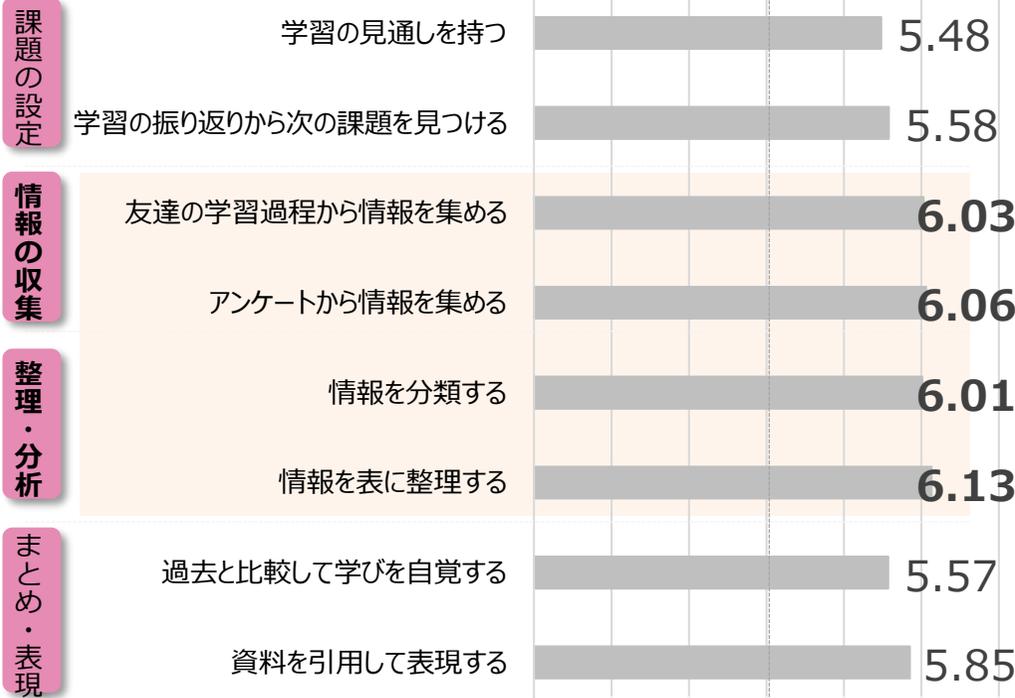
調査期間

2025年4月23日から5月2日までの10日間

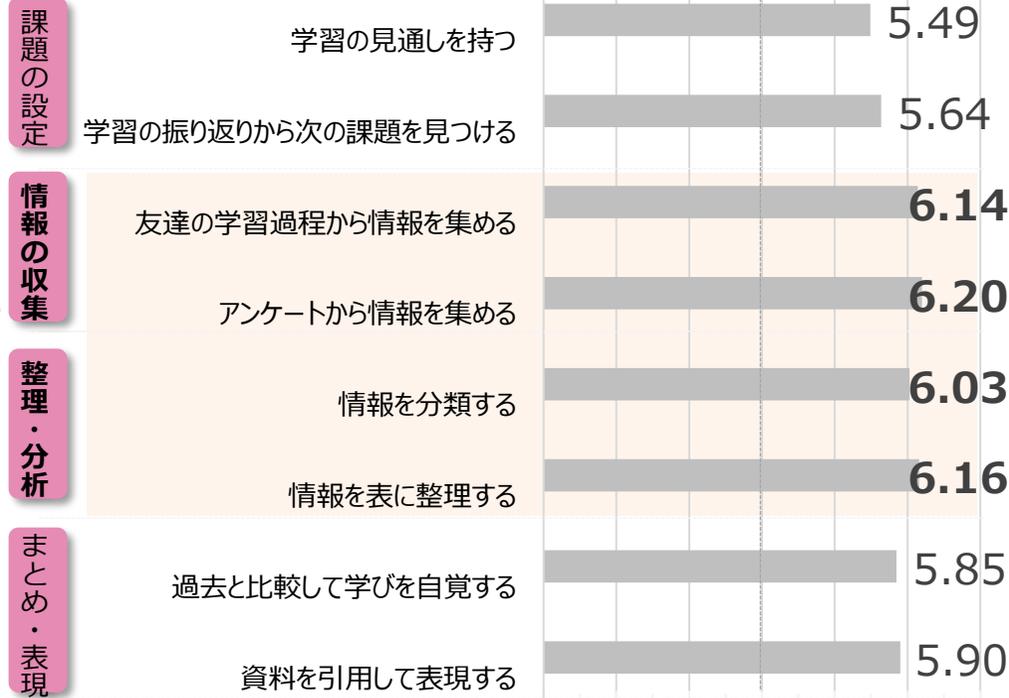
(発表予定)  
泰山裕, 登本洋子, 佐藤和紀, 堀田龍也: 1人1台端末の活用の探究的な学習への質的・効率的影響の検討. 日本教育工学会研究報告集 JSET2025-2 2025/07/05発表予定 (北海道大学)

- 探究的な活動で端末活用⇒活用なしと比べ、探究の質の高まり・効率化を実感
- 特に「情報収集」「整理・分析」の学習過程でスコアが高い（7点満点で6点以上）

## 質の高まり



## 時間の効率化



質を低下させず時間短縮も可能とし、探究のプロセスで時間をかけるべきところに時間を確保し、質を高めることが可能に

（出典）泰山裕，登本洋子，佐藤和紀，堀田龍也「1人1台端末の活用の探究的な学習への質的・効率的影響についての調査」結果より作成。2025年4月23日から5月2日までの10日間でWebフォームを用いて全国の公立・私立の小学校・中学校に在籍する279名の教師から回答受領

※：上記表内の値は、これまでも行われてきた探究的な学習でよく行われる活動について、1：「端末を活用しない方が質が高まる」～7：「端末を活用する方が質が高まる」，もしくは「端末を活用しない方が時短になる」～7：「端末を活用する方が時短になる」の7段階の選択肢への教師の回答の平均値を指す。それぞれ40ほどの活動についての質問項目があり，紙面上、学習過程ごとに特に値が高い探究活動を中心に抜粋しているが，その他の活動においても値は平均値4以上のポジティブな回答。

# 端末の活用頻度が高い方が、 探究的な学びの質の高まり・効率化の実感が高い傾向

## 質の高まり

活用しない  
方が質向上

活用する  
方が質向上



課題の設定

学習の見通しを持つ



学習の振り返りから次の課題を見つける



情報の収集

友達の学習過程から情報を集める



アンケートから情報を集める



整理・分析

情報を分類する



情報を表に整理する

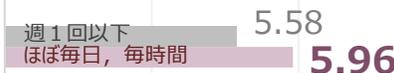


まとめ・表現

過去と比較して学びを自覚する



資料を引用して表現する



## 時間の効率化

活用しない  
方が時短

活用する  
方が時短

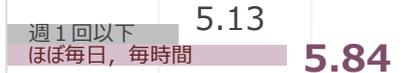


課題の設定

学習の見通しを持つ



学習の振り返りから次の課題を見つける



情報の収集

友達の学習過程から情報を集める

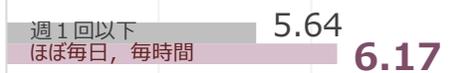


アンケートから情報を集める

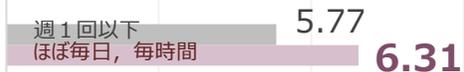


整理・分析

情報を分類する



情報を表に整理する



まとめ・表現

過去と比較して学びを自覚する



資料を引用して表現する



質を低下させず時間短縮も可能とし、探究のプロセスで時間をかけるべきところに時間を確保し、質を高めることが可能に

A decorative graphic on the left side of the slide. It features two overlapping circles: the top one is blue and teal with a white center, and the bottom one is purple and pink with a white center. A horizontal, multi-colored wave (blue, purple, pink) extends from the circles across the slide.

## 5. その他

# 探究的な学びの分類について

- Banchi,H., & Bell,R. (2008) は、教師から与えられる問、手続き、解法の提供範囲に応じて探究学習を複数のレベルに分類している
- レベル 1、2 の探究は各教科で実施されることが多く、より高度な探究と往還しあうことが重要とされる

	各教科の時間	総合的な学習（探究）の時間	教師から与えられる		
			問い	手続き	解法
レベル 4	<b>オープンな探究 (open inquiry)</b> ・ 生徒が自分でデザインまたは選択した手続きを用いて、生徒自らが立てた問いについて調査する		—	—	—
	<b>指導された探究 (guided inquiry)</b> ・ 生徒が自分でデザインまたは選択した手続きを用いて、教師が示した問いについて実験する		○	—	—
	<b>構造化された探究 (Structured inquiry)</b> ・ 与えられた手続きにしたがって、教師が示した問いについて実験する		○	○	—
レベル 1	<b>確認のための探究 (Confirmation inquiry)</b> ・ 前もって結果が分かっている場合に、活動を通じて原理を確認する		○	○	○



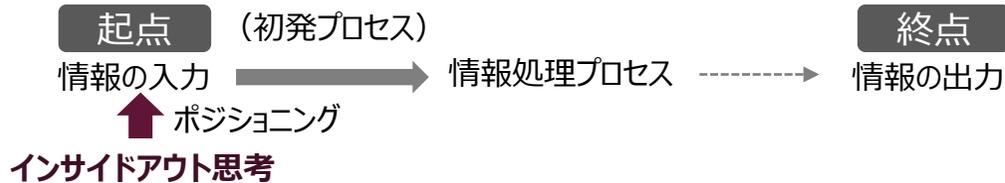
- ・ 溝上慎一氏は、終点がある程度見定められたところで押し進められる思考様式「アウトサイドイン思考」に対して、終点の一つに定まらない中で進められる思考を「インサイドアウト思考」と定義している。
- ・ 「インサイドアウト思考」は「原初的な創造的思考」の特徴を持ち、一般の人びとが日常で普通に行う思考であり、個性的な学習やライフを構築していく基礎となると指摘している。

## 溝上慎一「インサイドアウト思考 創造的な思考から個性的な学習・ライフの構築へ」

### 「インサイドアウト思考 (inside-out thinking)」

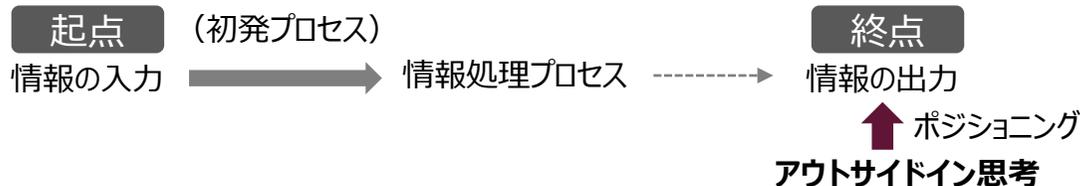
入力された情報（情報処理の起点）にポジショニングをして、そこからある情報を生み出す情報処理の初発プロセスを問題とする思考様式である」と定義

- ・ どこに向かっているか、どのような情報を入力するかはわからない中で進められるものである
- ・ インサイドアウト思考は終点としての結果が見えない中でなされるものであることから、それによって作り出された考えは、ゆるやかに「新しい考え」であるとみなすことができる。～（中略）それは「創造的思考 (creative thinking)」の概念に接近する。インサイドアウト思考は思考論の原点であるのみならず、思考論それ自体の持つ原初的な創造的思考の特徴を併せ持つものといえることにもなる
- ・ 原初的な創造的思考の特徴をインサイドアウト思考に付与する理由の一つは、～（中略）一般の人びとが日常で普通に行う思考として捉えたい



### 「アウトサイドイン思考 (outside-in thinking)」

「出力された情報、あるいは情報処理の途中であってもそこまで押し進められた情報（情報処理の終点）にポジショニングをして、起点から終点に至るプロセスを問題とする思考様式である」と定義



## 主体性の目標分類（タキノミー）について

表. 「主体性」のタキノミー（学びへの関与と所有権の拡大のグラデーション）

（出典：石井英真『中学校・高等学校 授業が変わる学習評価深化論』図書文化、2023年）

特別活動	自治（変革人：エージェンシー）	社会関係を創りかえる
		対象世界を創りかえる
総合学習	人間的成熟（なりたい自分：アイデンティティ）	軸（思想）の形成
		視座の高まり
教科学習	自律（探究人：こだわり）	自分事の間いの深化
		間いの生成
教科学習	学び超え（生涯学習者・独立的学習者）	思考の習慣（知的性向）
		関心の広がり
教科学習	学習態度（自己調整学習者・知的な初心者）	方略的工夫
		試行錯誤
教科学習	関心・意欲	積極性（内発的動機づけ）
	表面的参加	受身（外発的動機づけ）

出口の情意

入口の情意

## 探究的な学びと児童生徒のメタ認知方略等との関連

- 国内外の調査では、探究学習が児童生徒の自律的学習動機、メタ認知方略、創造的思考といった非認知能力と関連があることが示されている

### 動機付けやメタ認知方略との関連（国内）

- 地域や学校規模に配慮したうえで、国公立小学校に在籍する5年生から6年生の児童718名を対象に事前調査と事後調査を実施、SL（サービスラーニング）型総合的学習\*と非認知能力との関連を調査

- 自覚的にSL型総合的学習に取り組んだ児童生徒と、そうではない児童生徒間では、メタ認知方略、自己効力感、動機付け（自律的学習動機）、動機付け（期待価値）の非認知能力に有意な差があった
- 自覚的にSL型総合的学習に取り組んだ児童生徒は、そうではない児童生徒と比較して動機付け（期待価値）やメタ認知方略に係る非認知能力が有意に上昇

\* (a) プログラムをアカデミックなカリキュラムや体系的カリキュラムやそれらの目標と関連付ける、(b) 若者の声を取り入れる、(c) コミュニティ・パートナーを関与させる、(d) リフレクションの機会を提供する、の4つの要素を含む学習

(出典) 加藤智「初等教育におけるサービス・ラーニング型総合的な学習の時間が育成する非認知的スキルに関する研究」(2022) 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要/38

### 創造的思考との関連（国外）

- 科学分野の探究型アプローチ（Inquiry-Based Approach）学習と従来型の学習双方を受けた初等中等教育段階の児童生徒1,349名（レバノン・マレーシア・タイ・インドネシア・台湾等）を対象に、探究型アプローチ学習と非認知能力との関連を調査

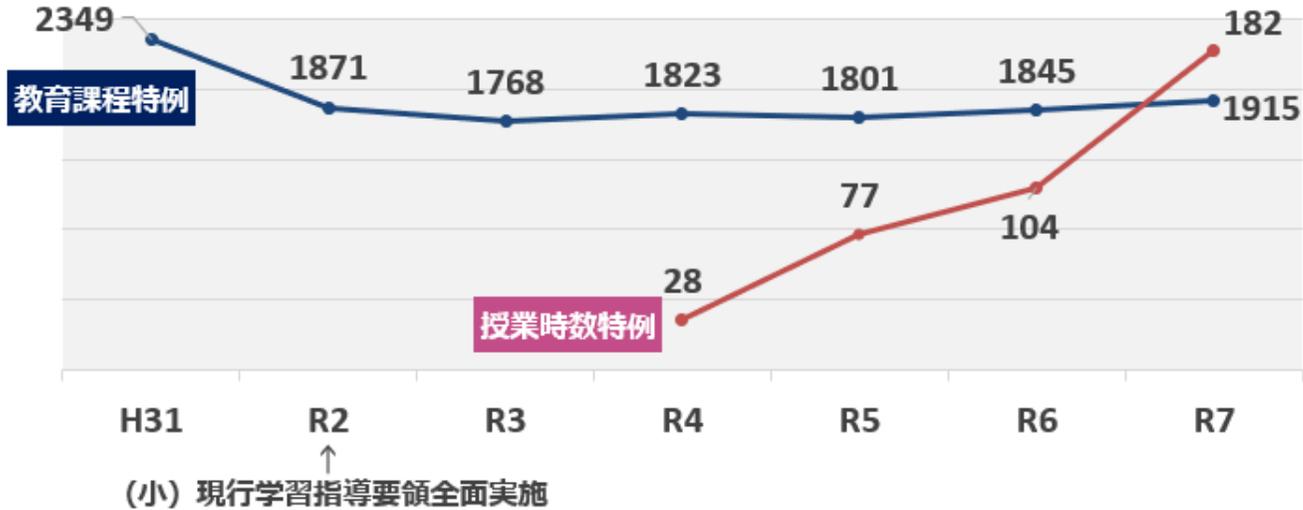
- 探究型アプローチ学習は、初等教育段階、中等教育段階いずれにおいても、従来型の学習と比較して児童生徒の論理的思考、創造的思考、批判的思考、問題解決力等に関連がある点が示された

(出典) Antonio, R.P. & Prudente M.S. (2024). Effects of inquiry-based approaches on students' higher-order thinking skills in science: A meta-analysis. International Journal of Education in Mathematics, Science, and Technology (IJEMST), 12(1), 251-281.

# 教育課程特例校・授業時数特例校の状況

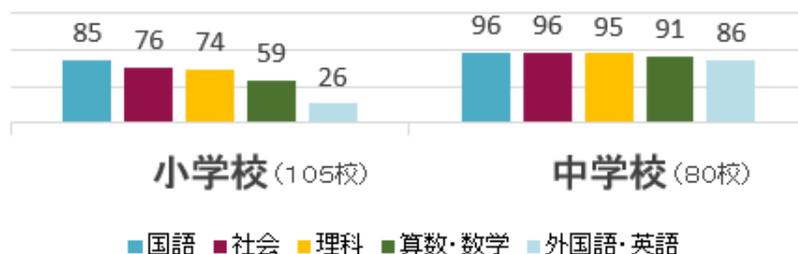
授業時数特例校においては、総合の時数を増やしている学校が9割以上

## 指定校数の推移



## 授業時数特例校における取組状況

### 各教科の時数を減じている学校の割合 (%)



### 各教科の時数を増やしている学校の割合 (%)

